

新編  
東洋史教科書

桑原隲藏校  
開成館編纂  
全

187  
49



高等師範  
學校教授  
文學士桑原隲藏校

# 新編東洋史教科書

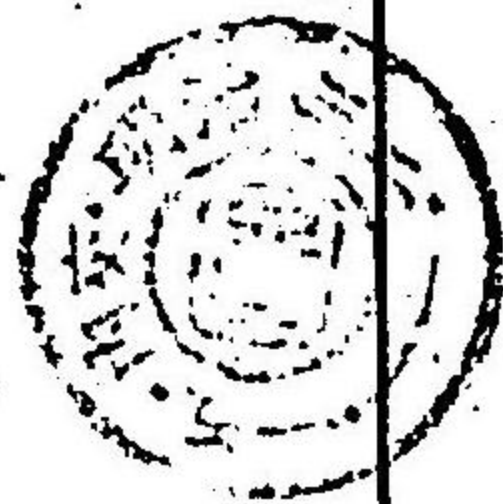
開成館編輯所著

## 例言

- 一、本書は、文部省の教科細目に據り、之に編者の考案を交へて、中等教育の用に充てんが爲に、編纂せるものなり。隨て其分量の如きは、授業時間數に應じて、過不足なからしめんことを務めたり。
- 一、連絡と趣味とは、教授上に大切なるものなれば、編者は及ぶ限り、此點に留意したり。
- 一、本書中、時代の區別は、固より便宜上のものに過ぎず。但し各時代の特徵とすべきものを尋ねて、一々章首に、細字を以て、其概要を提記し、以て讀者記憶の一助とせり。
- 一、本書中、年代を記するに、日本の紀元を用ゐ、以て讀者既修の國史と、相對照するに便ならしめんことを圖れり。
- 一、各章の末に、重要事蹟の年表を附し置けり。こは讀者復習の一助



## 例言



- 一、本書は、文部省の教科細目に據り、之に編者の考案を交へて、中等教育の用に充てんが爲に、編纂せるものなり。隨て其分量の如きは、授業時間數に應じて、過不足なからしめんことを務めたり。
- 二、連絡と趣味とは、教授上に大切なるものなれば、編者は及ぶ限り、此點に留意したり。
- 三、本書中、時代の區別は、固より便宜上のものに過ぎず、但し各時代の特徵とすべきものを尋ねて、一々章首に、細字を以て、其概要を提記し、以て讀者記憶の一助とせり。
- 四、本書中、年代を記するに、日本の紀元を用ゐ、以て讀者既修の國史と相對照するに便ならしめんことを圖れり。
- 五、各章の末に、重要事蹟の年表を附し置けり。こは讀者復習の一助



こともならんことを欲してなり。  
 一、本文中、處々に細字を以て挿入せるものは、唯參考に供するに過ぎざれば、これは教授の際省略するも可なり。  
 一、日本の事蹟にして、東洋史の研修に參考となるべきものは、欄外に摘記し置けり。これは編者が、讀者に對する一片の婆心に出づるのみ。  
 一、東洋の地名人名には難字多し、因りて此等には假字を施せり。且又全體の行文は、成るべく平易ならんことを務めたり。  
 一、沿革地圖は、別冊とせり。

明治三十二年八月

編者識

新編 東洋史教科書 目次

總論

第一章 唐虞三代時代(太古より皇紀四四〇年まで)

第一節 支那の太古……………一頁

第二節 夏殷の治亂興亡……………三頁

第三節 周初の治亂及び其制度……………五頁

第四節 春秋の五霸……………八頁

第五節 戰國の七雄……………十一頁

第六節 周末支那の學術……………十四頁

第七節 印度古史 婆羅門教 釋迦牟尼……………十六頁

第二章 秦漢時代(皇紀四四〇年より八八〇年まで)



第一節 秦の興亡 匈奴……………二十一頁

第二節 漢楚の分争……………二十四頁

第三節 漢の初世……………二十六頁

第四節 漢武の文勳及び外征 南越 朝鮮  
匈奴 西域諸國……………二十八頁

第五節 漢の中葉……………三十四頁

第六節 漢の中絶及び再興……………三十五頁

第七節 東漢と匈奴及び西域 班超の遠征  
佛教の東流 鮮卑……………三十七頁

第八節 東漢の末葉……………四十頁

**第三章 魏晉南北朝時代**(皇紀八八〇年より  
一二四九年まで)  
第一節 三國の鼎立……………四十五頁

第二節 朝鮮の形勢 高句麗 新羅  
百濟……………四十八頁

第三節 晉の衰亂……………五十頁

第四節 東晉と五胡十六國……………五十三頁

第五節 南北朝の變遷……………五十七頁

第六節 當代支那の學藝宗教……………六十二頁

第七節 中央亞細亞の形勢 波斯 嚙噠  
柔然 吐谷渾 突厥……………六十四頁

**第四章 隋唐時代**(皇紀一二四九年より  
一五六七年まで)  
第一節 隋の煬帝……………六十七頁

第二節 唐初の内治及び制度……………六十九頁

第三節 唐初の外政 東西突厥 朝鮮……………七十二頁



第四節 武韋の禍……………七十四頁

第五節 安史の亂……………七十六頁

第六節 回紇吐蕃渤海大食諸國……………七十八頁

第七節 唐の衰滅……………八十頁

第八節 當代支那の學藝宗教……………八十二頁

**第五章 五代宋時代**(皇紀一五六七年よ  
り一九四〇年まで)

第一節 五代の沿革 契丹……………八十七頁

第二節 宋の初世 安南 高麗 西夏……………九十一頁

第三節 新法の争……………九十五頁

第四節 宋代支那の學術宗教……………九十八頁

第五節 金遼の興亡 宋金の和戰……………百頁

第六節 蒙古の勃興 西域の形勢 西遼……………百頁

第七節 塞爾受克國 花刺子模 印度……………百四頁

第八節 蒙古太祖の雄圖 南露の征伐……………百七頁

第八節 金の滅亡 蒙古の西征 欽察汗國  
伊蘭汗國……………百九頁

第九節 宋の滅亡 南宋の文學……………百十三頁

**第六章 元明時代**(皇紀一九四〇年よ  
り二三〇四年まで)

第一節 世祖 蒙古族の全盛 東西兩洋  
の交通 高麗……………百十七頁

第二節 元の衰滅……………百二十一頁

第三節 明の初世 安南征服 韃靼部  
瓦剌部……………百二十三頁

第四節 明の内憂外患(一) 北虜 南倭……………百二十六頁



第五節 明の内憂外患(二) 朝鮮の役 百二十九頁

滿清の興起……………百二十九頁

第六節 明の滅亡……………百三十三頁

第七節 當代支那の學術宗教……………百三十五頁

第八節 帖木兒の勃興 「オットマントル  
コ」 波斯……………百三十八頁

第九節 印度の形勢 葡人蘭人英人……………百四十一頁

**第七章 清時代** (皇紀二三〇四年  
より現時に至る)

第一節 康熙帝の勲業 露國 蒙古  
西藏……………百四十五頁

第二節 清領の擴張 準噶爾 喀什噶爾……………百四十九頁

第三節 清朝の制度學藝……………百五十一頁

第四節 清朝の衰運……………百五十四頁

第五節 英國と印度 鴉片戰爭……………百五十五頁

第六節 髮賊の亂 英佛の來攻……………百五十九頁

第七節 髮賊の平定 臺灣の紛議……………百六十一頁

第八節 中央亞細亞の形勢 伊犁問題 阿  
富汗事件 「バミール」問題……………百六十三頁

第九節 後印度說國 暹羅 緬甸 安南  
清佛戰爭……………百六十六頁

第十節 日清韓三國の關係 日清戰爭……………百七十一頁

第十一節 日清戰爭後の東洋……………百七十五頁



新東洋史教科書 目次終

新東洋史教科書

開成館編纂

總論

亞細亞大洲の東半部、即ち支那、朝鮮、印度等の諸國は、西洋諸國を離れて、おのづから特殊の發達變遷をなせるものなるを以て、本書に此等諸國の興廢及び民族の消長を尋ねて、東洋史の名を付す。

東洋史の發端に於て、二箇の場所に文明の曙光を認む。一は黃河沿岸に在りて、黃色人種なる漢族の開きしものなり。他は印度河邊に在りて、白哲人種

東洋史の大流

東洋史



「ヒンツ」族は  
亞利亞派  
の白哲人  
種なり

「ヒンツ」  
族の  
特色

なる「ヒンツ」族の開きしものなり。而して漢族を、東洋史上最も重要なる種族とす。其初め漢族の周圍には、數多の蕃族ありしが、漢族は、次第に此等を驅逐し、或は征服して、其版圖を廣め、まづ支那本部に勢力を振ひ、遂に皇紀千三百年の頃には、國威の及ぶ所、東は朝鮮、滿州に達し、西は中央亞細亞を包有し、北は西比利亞より、南は印度諸國に至れり。この間、支那の制度、文物は、東洋諸國を風靡し、我が日本の開明にも、大に與りて力ありしなり。さて又印度にては、宗教の發達著しく、爲めに東洋諸國の人心に、至大なる影響を及ぼしたり。之を「ヒンツ」族

蒙古族

滿州族

文明の特色とす。かくて今を去ること凡そ六百餘年前、亞細亞の北部に蒙古族起りて、非常なる勢力を振ひ、東部亞細亞より、中央及び西部亞細亞に亘り、尙ほ歐羅巴の東南部に跨れる大帝國を開きぬ。この帝國瓦解して、後幾ならず、蒙古族の一部、印度を征服して、一帝國を建てたり。支那にては、漢族一旦其主權を回復せしかど、遂にまた滿州族の爲めに壓倒せられぬ。蒙古族最盛の頃より、歐洲人の東洋に來るもの漸く多く、降りて近代に至りては、政治、上商業上に於ける東西兩洋の關係、益頻繁となり。以上を東洋史の大流とす。



東洋史記述の方法

要するに東洋諸國の中にて、支那の發達變遷は、歴史の主要なる部分を占むるものなれば、本書に於ては、支那の歴史を本體とし、隨て其歷朝の名を用ゐて、時期を區分し、他諸國の事蹟の如きは、便宜其間に挿入記述するの方法を採れり。

### 第一章 唐虞三代時代(太古より皇紀四四〇年まで)

太古より、秦の一統に至るまでを唐虞三代時代とす。此時代の始に於て、黄河沿邊の地と、印度河沿邊の地とに、東洋文化の萌芽を發したり。されど兩者の間には、爾後長く何等の關係も存せざりき。而して漢族の周圍には、數多の蕃族ありて、漢族と相衝突せしが、漢族漸く勢力を得て、江河の間に繁殖し、秦に至り、殆ど現今の支那本部を一統したり。此間漢族革命の大勢を示せば、左の如し。

太古—唐堯—虞舜—夏十七世—殷二十八世—周三十七世—秦四四〇年

#### 第一節 支那の太古

苗族  
支那文化の發端 支那は、太古の時代に於て、苗族といへる人種、早く江(揚子)河(黃)の間に居を占めたりしが、今より五千餘年前に、漢族、西北方より黄河沿岸に移住し來り、次第に漢族の移住



三皇五帝

繁殖して、江水の邊に及び、原住者たりし苗族を南方に逐ひて、其地を領有するに至りき。漢族は、自ら稱して華夏といひ、以て四方の蕃族と區別したり。其太古の事蹟、得て詳にし難し。雖も、舊來の傳説によりて、略其文化の一斑を窺ひ知ることを得べし。蓋し太古の帝王に、伏羲神農黃帝の三皇あり、之に繼ぎて少昊顓頊帝嚳唐堯虞舜の五帝(三皇五帝に就ては異説あり)あり。伏羲始めて八卦を畫し、漁獵を教へ、神農始めて耕作貿易を教へ、醫藥を製し、黃帝始めて舟車を造り、音樂を定め、文字を製したりといふ。少昊顓頊帝嚳に就いては、別に著しき事蹟なし。

唐堯の治

**唐堯虞舜** 唐堯虞舜は、今より四千餘年前に出づ。支那聖人の稱首として、世に崇拜せらるる帝王なり。是れより以後は、史蹟漸く明なり。唐堯は、質素と勉強とを以て、政治に従ひ、又

大洪水

虞舜の治

始めて曆法を定め、三百六十六日を以て、一年と爲したり。帝の晩年に於て、九年に亘れる大洪水あり。鯀といふ者に命じて、之を治めしめしかど、其功なかりき。當時民間に虞舜といふ者あり、至孝賢明を以て聞えければ、帝堯之を擧げて天下の事を攝行せしめたり。舜乃ち不能を退け、賢才を擧げ、鯀に代ふるに其子禹を以てし、遂に全く治水の功を成せり。帝堯は、子丹朱不肖なるを以て、位を舜に禪れり。唐虞の際、禹、皋陶、稷、契等の名臣、朝に列し、内は官制を定め、刑法を制し、外は苗族を驅逐して、版圖を南方に廣め、社會の秩序頗る整頓したり。帝舜も亦、子商均不肖なるを以て、位を禹に禪れり。

第二節 夏殷の治亂興亡

**夏の時代** 禹は、顓頊の孫なり。帝舜の禪を受けて位に上り、



禹王  
王位世襲

國號を夏といへり。禹王人となり恭儉にして、仁政を施さば、民皆悦服せり。禹死して、子啓位を嗣ぐ。王位世襲の例、こゝに始まる。啓の孫相の時に、有窮の後羿といふ者、叛き相を逐ひて自立せしが、其臣寒浞また羿を殺して篡立し、禹の血統中絶すること四十餘年なりき。然るに相の子少康、舊臣を糾合して、浞を誅し、王業を恢復し、十餘傳して履癸に至る。世之を桀王と稱す。淫虐暴戾にして、人望を失ひ、湯といふ諸侯の爲めに滅ばされぬ。(皇紀前一一〇年頃)

**殷の時代** 湯は、唐虞の名臣契の後裔なり。伊尹といふ賢者を擧げて、之に政を委ね、亳(河南)に都して、専ら徳政を修めしが、遂に桀王に代りて、位に上り、國號を商といへり。十數傳して盤庚に至り、都を殷(河南)に遷じたり。是れより商は、又殷と號す。後三傳して武丁に至り、賢者傅説を民間より拔擢して、

夏の中絶  
桀王の暴

湯王  
伊尹

盤庚の遷都

紂王の暴

宰相となし、大に國運を興せしが、數世を経て、帝辛といふ暴君を出しぬ。帝辛は、世に紂王と稱し、殘忍暴虐、桀王に過ぎ、租税を重くし、刑罰を嚴にし、日に酒地肉林の樂に耽り、箕子微子比干(殷)之を諫むれども、聽かず、かゝりしかば、天下王を怨むもの多く、周の武王起りて、殷を亡びぬ。(皇紀前四六〇年頃)

第三節 周初の治亂及び其制度

古公亶父

文王  
太公望

**周の武王** 周の武王は、唐虞の名臣稷の裔なり。稷より十餘世の後、古公亶父といふ者、獯鬻の寇を避けて、岐山の下に住し、始めて國を周と號せり。子季歷、孫昌、相繼ぎてよく祖業を修む。殊に昌は、殷紂虐政の世に出で、大に仁政を行ひしかば、民心漸く殷を離れて、周に歸したり。世に聖人として傳へたる文王は、即ち是人なり。昌死して、子發嗣ぎ、謀臣太公望の



武王 計を用ゐて、殷を滅ぼし、王位に鎬京(省陝西)に即けり、之を武王とす。

公侯伯子男 是に於て武王、公侯伯子男の五爵を建て、宗族功臣を諸侯に封じ、特に殷の遺臣箕子を優待して、之を朝鮮に封じたり。

周公 周公の攝政、周の制度 武王死して、子成王尙ほ幼なり、叔父周公、遺詔を承けて、政を攝し、能く文武の業を大成して、周室の基を固めたり、又此時都を洛邑(省河南)に營み、鎬京に對して、之を東都といへり、周公聰明多能にして、經綸の才に富み、諸般の制度を定めて、百世の下に模範を垂れぬ。

東都 周の時、中央政府に天(長官は冢宰)、地(長官は司徒)、春(長官は大宗伯)、夏(長官は大司馬)、秋(長官は大司寇)、冬(長官は大司空)の六官を設く、天官は庶政を總理し、地官は民治を掌り、春官は祭祀典禮を掌り、夏官は兵馬を掌り、秋官は刑律外交を掌り、冬官は工藝を掌れり、六官の上に、又三公

官制 是に於て武王、公侯伯子男の五爵を建て、宗族功臣を諸侯に封じ、特に殷の遺臣箕子を優待して、之を朝鮮に封じたり。

周の時、中央政府に天(長官は冢宰)、地(長官は司徒)、春(長官は大宗伯)、夏(長官は大司馬)、秋(長官は大司寇)、冬(長官は大司空)の六官を設く、天官は庶政を總理し、地官は民治を掌り、春官は祭祀典禮を掌り、夏官は兵馬を掌り、秋官は刑律外交を掌り、冬官は工藝を掌れり、六官の上に、又三公

(太師太保少師少保)あり、されどこは、常置の官に非ずして、且政務には與らざりき。

田制税法は、夏の時、每家五十畝の田を授け、五畝の收穫を上納せしめたり、之を貢法といふ、殷の時には、井田の法を用ゐ、一井六百三十畝を九區に分ち、八區を私田とし、一區を公田とし、八家協力して公田を耕し、其收穫を上納せしめたり、之を助法といふ、周に至りては、貢助並び用ゐ、之を徹法といひ、一家受くる所の田を百畝と定む(但し五十畝といひ、七十畝といひ、百畝といふも、實際の廣一狭は、同)、以上の租税を粟米の征といひ、外に力役の征、布縷の征等あり、又學制は、大學小學に分ち、國都に、地方に、其設け遍く、大學にては、己れを脩め人を治むるの道を教へ、小學にては、禮樂射御書數の六藝を教へたり。

學制 成康の治、周室の東遷 成王より、次の康王の世を終るまで、

周室の盛

成康の治、周室の東遷 成王より、次の康王の世を終るまで、



厲王

宣王

幽王

平王の遷都

周室其盛を極め、四十餘年間天下太平なりき。然るに昭王穆王の時より、王威漸く衰へ、數傳して厲王に至り、虐政を施しかば、國人畔きて王を逐へり。宣王立つに及び、仲山甫、尹吉甫等の賢者を用ひ、内は庶政を整へ、外は玃狁、荆、徐等の諸蠻を驅りて、大に周室を興したりしが、其後幽王に至り、褒姒を愛して、政を怠り、遂に皇后申氏と太子宜臼とを併せて、之を廢せしかば、申後の父、申侯、大に怒り、犬戎を誘ひ來りて、王を攻め殺したり。宜臼諸侯に擁立せられて、天子となる。之を平王とす。平王は、犬戎の鋒を避けて、都を洛邑に遷しぬ。(皇紀前一〇〇年)之を周室の東遷といひ、以後を東周の世と稱す。

第四節 春秋の五覇

春秋の世 平王の遷都より以後、凡そ三百年間を、春秋の世

春秋の十四國

五覇

齊の桓公

管仲

宋の襄公

といふ。この間周室益衰微して、天下次第に亂れぬ。當時諸侯の大なる者十四あり、即ち魯、衛、晉、鄭、燕、蔡、曹、吳、齊、宋、楚、陳、秦、越にして、前の八國は周と同姓、後の六國は異姓なり。其餘小國、尙ほ甚だ多かりき。而して勢力強大にして、能く諸侯の長たりしものを、齊の桓公、宋の襄公、晉の文公、秦の繆公、楚の莊王とす。世に之を春秋の五覇と稱す。

齊の覇業 齊の桓公は、管仲といふ政治家を用ゐて、盛に富國強兵の策を講じ、小國を扶け、戎狄を攘ひ、又王事に力を盡したり。蓋し五覇の中、桓公を以て、功業最も盛なるものとす。然れども管仲、桓公、相つぎて死するに及び、内亂起りて、國勢頓に挫けぬ。

宋の覇業 宋の襄公は、桓公に次いで、覇業を企て、先づ齊の内亂を定めて、其勢將に盛ならんことをせしかば、楚と戦ふに及



び、大敗して、覇業忽ち地に墜ちたり。

宋の襄公、楚と戦ひ、兩軍泓水を挟みて、對陣せり。楚軍先づ川を渡らんとせしかば、宋の將、敵の未だ渡り畢らざるに乗じて、進撃せんことを請ひしに、襄公聽かず。既にして楚軍川を渡り、宋軍之と戦ひて、大に敗北せり。敗後襄公は、國人の己れを非難するを聞き、君子は人を阨に困めずといひければ、世人笑ひて、宋襄の仁と稱したりとぞ。

宋襄の仁

晉の文公

晉の覇業 襄公敗後、晉の文公は、名臣狐偃、趙衰等の輔佐に

秦の繆公

依りて、覇業を成し、爾來百餘年間、晉常に諸侯の盟主たり。秦の繆公は、百里奚、蹇叔等の

楚の莊王

諸賢を用ゐて、大に地を西方に拓き、西戎の間に覇たり。楚の覇業 楚は、春秋の初より、既に王號を僭して、南方に雄

視せしが、莊王に至りて、勢俄に強く、頻に諸侯を破りて、南方の覇者となれり。

伍子胥

吳越の交戦 春秋の末に至り、吳越の二國、江南に於て互に

吳王夫差

雄を争へり。吳は其王闔閭に至り、楚の亡臣伍子胥を用ひて、

越王勾踐

大に楚を破りて、威を振ひしが、後越王勾踐と戦ひて、敗死せ

范蠡

り。其子夫差、吳王となるに及び、復讐の師を發して、越を破り、

勾踐を會稽(浙江)に圍みて、之を降しき。勾踐は、恥を忍びて、多年吳に屈從せしが、窃に謀臣范蠡と兵を練り、夫差の懈れるに乗じて、之を攻め殺し、全く吳を滅ぼしたり。

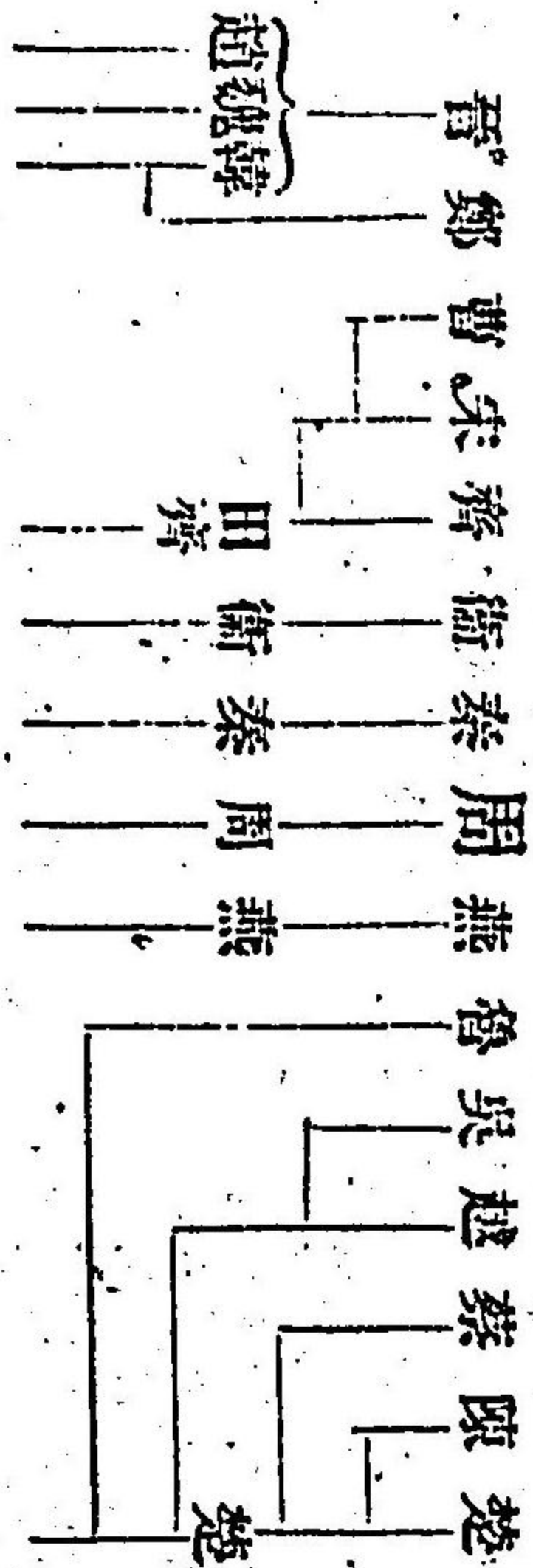
### 第五節 戰國の七雄

戰國の世 周室は、平王より十九傳して威烈王に至る、以後を戰國の世といふ。この時代には、弱肉強食の争益烈しく、世は全く修羅の衢と化し去れり。かくて幾多の小國大抵亡び盡し、晉は韓、魏、趙、三氏の分割する所となり、齊は田氏の篡ふ



戰國七雄

所となり、越また楚に併され、春秋時代の強國としては、秦楚燕の三國のみとなるに至りぬ。この秦楚燕、齊、韓、魏、趙を戰國の七雄と稱す。



商鞅

秦の強盛 七雄國互に攻伐を事せし間に、嶄然頭角を現はし、ものを秦とす。秦は、繆公以來西戎に覇たりしが、孝公立つに及び、商鞅といふ政治家を用ゐて、強兵の策を講じ、國力駸々として、他の六國を壓せんとするに至りしかば、合従の説従ひて起れり。

合従の説 合従とは、六國力を合せて、秦に當るの謂にして、

蘇秦

蘇秦の首唱せし所なり。蘇秦は名高き雄辯家にして、燕より趙、趙より韓、魏、齊、楚、と次第に合従の利を遊説し、悉くその容るゝ所となれり。是に於て蘇秦、六國の相印を佩び、從約の長となりて、専ら秦を弱めんを圖りぬ。秦大に之を患ひ、巧に齊魏を欺きて、趙を伐たしめければ、從約忽ち破れき。

張儀

連衡の説 蘇秦の友に、張儀といふものあり。從約の解くるを見て、秦の爲めに連衡の策を立て、先づ楚を欺き、齊に絶ちて、秦と和せしめ、得意の智辯を振ひて、爾餘の五國をも説服し、六國をして皆秦に事へしめたり。幾もなく、連衡亦破れぬ。是より策士説客、雲の如く起り、或は合従を説き、或は連衡を唱へ、其他奇材異能の士、續々輩出して、各技を競ひ、智を闘はして、天下の事紛雜を極めたり。

戰國の時代には、有力者皆競ひて、客を養ひ、士を蓄へ、事あるの際に、其才智



戰國の四君

技能を利用せんことを計りしが、中にも齊の孟嘗君、楚の春申君、趙の平原君、魏の信陵君は、門下の食客、常に三千餘人の多きに及び、戰國の四君とは、即ち是れなり。

范雎

秦の統一 既にして秦は、范雎を相とし、遠交近攻の策を以

周の滅亡

て、益諸侯を削弱しければ、周の赧王大に懼れ、竊に六國に命

諸侯の滅亡

じて、秦を伐たしめんことをせしに、反りて秦の爲に攻め滅ぼさ

れぬ。(皇紀四〇五年)其後秦は、破竹の勢を以て、韓、趙、魏、楚、燕、齊、衛を滅ばし、天下を統一したり。(皇紀四〇四年)

第六節 周末支那の學術

學術上の戰國時代 戰國時代は、其名の如く、秩序紊れ、政令

行はれず、臣、君を弑し、子、父を逐ふも、人之を怪まざる程の亂

世なりき。然れども、言論上の束縛全く解けて、各人の自由其

支那學術の淵源

孔子

極に達しければ、學者、論客、文人、辯士、踵を接して輩出し、人心發動の活潑なる、實に空前絶後といふべし。されば此時代は、啻に政治上の戰國たるのみならず、又學術上の戰國ともいふべく、支那後世の學術は、多く源をこゝに發したり。今春秋時代より戰國時代に亘り、其最も名高き學者を、左に列擧す

孔子 春秋の末、魯に孔子を出せり。(皇紀一八二〇年に生れ、一八二一年に死す)孔子

聖徳ありて、學識古今に秀で、修身治國の道を以て、諸侯に説

きしかども、用ゐられず、退きて諸弟子と、學を講じ、道を談じ、

世を終れり。論語といふ書は、重に其言行を輯録したるもの

なり。當時其門下に來り學ぶもの、三千人の多きに上りき。其

孫子思は、中庸といふ書を著せり。孟子は、子思の緒を紹ぎ、大

に仁義を唱へたり。孔孟の道は、世に儒學と稱し、實に支那政

教の根本たり。孟子と同時に、荀子あり、大要孔子の道を祖述

子思孟子

儒學

荀子



せり。

老子 孔子と世を同じくして、周に老子あり、無爲自然の道を説きて、道德五千言を著し、列子、莊子、其後に、出でて、益其道を闡明せり、此學派を黃老、又は老莊の學といひ、後世之に附會して、道教といふもの起れり。

諸子百家 儒道兩家の外に、楊子は自愛の説を立て、墨子は兼愛の説を唱へ、申不害、韓非は、刑名學を講じ、鬼谷子及び其弟子蘇秦、張儀は、縱橫策を説けり、又孫武、吳起の兵法に於ける、公孫龍の詭辯に於ける、屈原の文辭に於ける等、最も著し、世に是等を總稱して、諸子百家といふ。

第七節 印度古史

印度の開闢、婆羅門教、階級制 今を去ること凡そ四千年前

「ドラビ  
ン」  
印度の四  
大部族  
婆羅門教  
章陀教

頃(唐虞時代)亞利亞人種の一派、中央亞細亞より、印度河邊に南下し來りて、其以前「ドラビド」ドといへる先住者ありしを撃ち從へて、文化を布き、其後漸く東方に進み、恒河の流域に及べり。當時此等の亞利亞人は、印度に於て數多の國を建てたり。亞利亞人は、其初め、章陀教とて、一種の多神教を信じ、火、水、雷、雨等の自然力を崇拜せしが、後一變して、萬有神教となり、梵天(ブラマ)を萬物の本源とし、靈魂の流轉を唱へ、人間は罪障を消滅して、流轉の苦を脱し、以て梵天に歸着せんことを務むべしと説けり、之を婆羅門教といふ。又印度の社會には、嚴格なる階級の別を生じて、婆羅門、刹諦、吠舍、首陀羅の四大部族となれり、婆羅門は、教法學術を掌りて、社會の最高位を占め、刹諦利は、兵政の二權を握りて、其次に位し、吠舍は、商工に従事して、又其次に位し、首陀羅は、最



下級の賤民にして、耕牧勞役を事せり。首陀羅は、即ち征服せられたる土族なり。

婆羅門の教學は、五明ゴメイとて、聲明、因明、内明、工巧明、醫方明を修めたり。聲明とは音韻學なり、因明とは論理學なり、内明とは斷惡修善の道を明にするものなり、工巧明とは天文星學を始め、其他技藝に關する學問なり、醫方明とは醫藥療病に關する學問なり。

然るに漸く時代を経るに従ひ、階級制は大に社界の進運を害し、婆羅門獨り權力を濫用して、放恣を極め、教法腐敗せしかば、有名なる釋迦牟尼シキヤムニは、刹諦利族より起りて、之が改革を圖りぬ。

釋迦牟尼 釋迦は、族名にして、姓を瞿曇クダマ、名を悉達多シキタダといふ。中印度なる劫毘羅伐率堵城主淨飯王の長子なり。皇紀三十九年の頃に生れ、百十八年の頃に入寂す。其晩年は、孔子の初

婆羅門教の腐敗

起 佛教の興

年に當れり。釋迦は、一國の太子として、何不足なき榮華の間に成長せしが、人間の老病死に苦むを觀て、深く世の無常を感じ、一夜宮殿を逃れ出で、山中に籠り、苦行多年の後、豁然大悟する所あり、遂に佛陀ブツとなる。佛陀とは、覺徳圓滿の謂なり。かくて布教に従事すること四十餘年、教徒漸く増して、次第に勢力を得たり。佛教は、婆羅門教に對して、平等無差別を唱へ、人間は一切の邪念を去りて、涅槃ニハツに達することを目的とすべしと説けり。佛教の徒は、婆羅門教の徒を外道ゴダウと呼びぬ。

歷山大王の侵入、阿輸迦王 釋迦入寂の後、二十餘年を経て、波斯國王「ダリウス」印度の西邊に侵入せしとありき。其後殆ど二百年を経て、西洋史上に名高き歷山大王アレキサンダー出で、波斯を席卷し、其餘威印度の西部に及びたり。幾もなく歷山大王の



摩揭陀國  
阿輸迦王

國土分崩し、此より生じたる、セリウカス王國の領地は、印度の一部をも包有せり、當時中印度の摩揭陀國には、旃陀羅瞿布多といふ者、毛利耶朝を立て、國勢甚だ盛なりき。毛利耶朝の第三世を阿輸迦王と云ふ(戰國末時)王は、仁慈にして、厚く佛教を信じ、頻に傳道師を派して、遠く異方に布教せしめ、或は道標を立て、教旨を記し、或は岩壁を削りて聖傳を刻む等、王の佛教に於ける功德、極めて多かりき。近來印度、阿富汗斯坦地方に於て、王の遺蹟の發見せらるゝもの、鮮からずといふ。

### 重要事蹟年表

紀元元年	前	紀	皇
三九頃			一七〇〇頃 帝堯即位 亞利亞人種印度に入る
一一〇			一六〇〇頃 帝舜即位
一一八頃			一五六〇頃 夏の朝興る
一四三			一一〇〇頃 夏亡び殷興る
一八二			四六〇頃 殷亡び周興る 箕子朝鮮に封せらる
			一一〇 周室の東遷
			二五 齊の桓公立つ
			紀元元年 周の惠王十七年
神武天皇	神武天皇	神武天皇	神武天皇 印度の釋迦生る
綏靖天皇	綏靖天皇	綏靖天皇	綏靖天皇 周の孔子生る
安寧天皇	安寧天皇	安寧天皇	安寧天皇 釋迦入寂す
天寧天皇	天寧天皇	天寧天皇	天寧天皇 波斯王、ダリウス印度を侵す
懿德天皇	懿德天皇	懿德天皇	懿德天皇 孔子死す



孝昭 天皇	孝安 天皇	孝靈 天皇	周元王	越王勾踐吳を滅ぼす
一八八	二五八	二七五	周威烈王	韓魏趙三氏諸侯となる
三二八	三二八	三三四	周安王	田氏齊侯となる
三三四	三二八	三三四	周顯王	蘇秦六國の相印を佩び從約の長となる
三八六	三三四	三三四	同上	希臘の歴山大王印度を侵す
四〇五	三三四	三三四	周赧王	印度毛利亞朝の阿輸迦王立つ
四一〇	三三四	三三四	同上	周亡ぶ
四一〇	三三四	三三四	秦政王	大夏安息の建國
四四〇	三三四	三三四	同上	秦支那を一統す

## 第二章 秦漢時代(紀元四四〇年より八八〇年まで)

秦の一統より、魏吳蜀三國鼎立まで、凡そ四百四十年を秦漢時代とす。即ち我が孝靈天皇より、神功皇后までの時代に當れり。此時代には、漢族の勢力益盛にして、其版圖支那本部以外に廣がり、中央亞細亞の諸國及び印度と交通を開きたり。此間漢族革命の大勢を示せば、左の如し。

秦 三世十五年 西漢 一二世二〇九年 新 一世十五年 東漢 一二世一九七年 魏 蜀 吳

### 第一節 秦の興亡 匈奴

**秦皇の内治** 秦王政は、剛愎大膽なる君にして、既に六國を併呑したる後、其徳は三皇を兼ね、功は五帝に過ぐして、新に皇帝の號を立て、又諡法を廢して、自ら始皇帝と稱したり。かくて從來の封建制を廢して、郡縣制となし、天下を三十六郡に分ち、守、尉、監を置きて、之を治めしめ、又民間の兵器を沒收

皇帝の稱

三十六郡

守尉監



して、禍亂の源を絶ち、諸郡の富豪を首府咸陽(錦京の北)に徙すこと十二萬戸に及び、以て天下の權力を中央に集めんことを計れり。又大に阿房宮を營み、て壯麗を極め、屢四方を巡行して、帝室の尊嚴を示したり。

西域諸國に於て、秦國を指して震旦と呼べり。支那といふ國名は、實にこの震旦より轉訛せしものと知らる。

**秦皇の外征** 戰國の世に、匈奴屢北方より中國に入寇し、燕趙、秦の三國常に其害を蒙りき。始皇乃ち將軍蒙恬をして、兵三十萬に將こして、匈奴を撃退せしめ、永く其侵入を絶たんか爲めに、大に長城を増築し、其長さ凡そ七百里に及び、又南の方越人を征して、今の安南地方に及び、秦の威名遠近に振へり。

**火坑の暴政** 然れども法令苛酷にして、聚斂日に甚しく、士

書を焚き  
儒生を坑  
殺す

二世皇帝

宦者趙高

陳勝吳廣

群雄の蜂  
起

項羽

民奔命に疲れて、天下漸く新政を厭ふに至り、學者亦往々時政を議するものありしかば、始皇は丞相李斯の議を用ゐ、醫藥卜筮種樹の書を除き、民間の書を聚めて、悉く之を焚き棄て、且儒生四百六十餘人を坑殺せり。

**宦者の專横、群雄の蜂起** 始皇死して、少子胡亥立つ、之を二世皇帝とす。帝暗愚にして、宦者趙高政權を恣にしたり。宦者の專横は、常に支那歷朝の禍をなすものにて、趙高は始めて其惡例を作りたる奸臣なり。かくて趙高の專横益甚しく、妄に皇族大臣を殺して、暴政を行ひければ、楚人陳勝は、吳廣と共に兵を起して、自ら楚王と稱し、諸郡縣争ひ起ちて之に應じたり。既にして二人共に其下の爲に殺されしかば、群雄相踵ぎて起り、就中項羽、劉邦の二人、最勢力ありき。

項羽、驍勇にして、膽略あり、兵を江東に起し、叔父項梁と共に



劉邦

楚の後を擁立して、懷王となし、以て民望を繋げり。

三世子嬰

劉邦、豁達にして、大度あり。項羽と同時に、兵を沛に起し、蕭何、曹參等の名士を率ゐて、懷王の麾下に屬したり。

秦の滅亡 項羽、劉邦、共に懷王の命を受けて、秦を伐つ。此際

趙高は、二世皇帝を弑し、子嬰を立てたり。子嬰即位の後、趙高を誅せしかば、秦室恢復の望既に絶え、劉邦の軍、早くも咸陽に迫り來りしかば、子嬰遂に出で降り、秦竝に亡びぬ。(皇紀四五年)

第二節 漢楚の争

鴻門の會

項羽の暴 劉邦既に秦を滅ぼし、苛政を除きて、民望を收めたり。項羽大軍を率ゐて、後れ至り、劉邦の功を忌みて、鴻門(咸陽東)の會合に、之を殺さんとしたりしが、劉邦は、其臣張良の智と、樊噲の勇により、辛くも虎口を免れき。當時項羽の勢力

義帝

は、劉邦に十倍せしかば、誰れ憚るものもなく、阿房宮を焼き、拂ひ、始皇の塚を發スき、降王子嬰を殺す等、傍若無人の振舞をなして東に歸れり。

西楚の霸王

項羽の勢力 項羽東歸の後、陽に懷王を尊びて、義帝となし、恣に功を論じ、賞を行ひて、諸將を分封し、自ら彭城(江蘇省)に都して、西楚の霸王と稱せり。初め懷王、諸將に、先づ關中に入らんものは、其地に王たるべきを約せしに、項羽は其約を履ま

漢王

ず、劉邦を巴蜀に封じて、漢王とせり。

漢王兵を起す

漢楚の戦、項羽の末路 既にもて項羽、義帝を弑せしかば、漢王其罪を鳴らして、義兵を擧げたり。爾來漢楚相戦ふこと四年に亘り、互に勝敗ありしが、遂に項羽の勢力漸く蹙り、垓下(安徽省)の一戦には、重圍の中に陥りぬ。項羽尙ほも殘兵八百を率ゐ、目に餘る大軍を駈け破りて、一條の血路を開き、烏江(揚子

垓下の戦



項羽敗死  
漢の高祖

江の流に至りしかば、故郷の人を見るの面目なしとて、江を渡らずして自殺したり。こゝに至りて、天下悉く漢王の手に歸せり。漢王乃ち帝位に即く、之を漢の高祖となす。

漢室は、一旦中絶して、又興れり。前の漢は、單に漢と稱し、又時の順序によりて、前漢ともいひ、首府の位置によりて、西漢ともいふ。後の漢は、之に對して、後漢又は東漢といふ。

### 第三節 漢の初世

漢の三傑

高祖の施政 高祖即位の後、都を長安(古の鎬京にして、咸陽の傍にあり)に定め、深く前代の跡に鑒みて、封建郡縣の制を並べ行ひ、同族及び諸功臣を封じて、諸侯王とせり。帝性寛厚にして、善く諫を納れ、又善く人を用ゐしかば、其臣下には、蕭何、張良、韓信の三傑を始めとして、曹參、陳平、周勃、彭越、英布、叔孫通、陸賈等文武

の人材數多ありき。然れども晩年に至り、深く身後の事を慮りて、漸く諸功臣を猜疑し、勳舊宿將之が爲めに、禍を蒙むるもの尠からざりき。

高祖、帝位に即きし後、一日故郷なる沛に至り、一族故舊を集めて、宴を張れり。其時自ら歌ひて曰く、大風起兮雲飛揚、威加海内兮歸故郷、安得猛士兮守四方と、これ即ち大風の歌とて、世に著しきものなり。

呂氏の難

呂太后 高祖死して、惠帝嗣ぎ立ちしかば、多病柔弱の君なりしかば、政權全く呂太后に歸したり。惠帝死せし後、太后は、擅に劉氏を除きて、呂氏を王とし、漢祚殆ど危かりしが、太后死するに及び、齊王首として、兵を外に擧げ、周勃、陳平、計を内に運らし、悉く呂氏の一族を平げて、文帝を迎へ立てたり。

文帝

文帝の仁政 文帝仁賢にして、よく政に勤め、深く民情を察して、田租を減じ、嚴刑を廢し、又儉素を旨とせしかば、在位二



景帝

龍錯  
七國の亂

周亞夫

武帝

十餘年の間、海内無事なりき。  
 吳楚七國の亂 景帝次いで立つ。此際諸侯王漸く驕傲に赴きしかば、帝は龍錯の策を用ゐて、楚、趙、膠、西、三王の地を削り、尋いで吳王の地に及ばんとせしに、吳王兵を擧げて反し、膠西、膠東、菑川、濟南、楚、趙の六王亦之に應じたり。帝乃ち周亞夫を大將軍として、之を討平せしめしかば、諸王跋扈の憂是れより已みき。此後天下清平にして、先帝仁政の結果益顯はれ、國庫充實して、錢穀勝けて用うべからざるに至れり。此幸福なる治世を、景帝より譲り受けたるものを、雄材英武なる武帝とす。

#### 第四節 漢武の文勳及び外征

文運の勃興 秦の火坑以來、典籍殆ど滅び盡して、學術其傳

年號の始

儒學

司馬遷  
司馬相如

を失ひしが、漢の時代となりて後、文教漸く其萌芽を發し來り、武帝に及び、始めて年號を立て、建元といひ、大學を興し、博士を置き、専ら儒學を崇び、詔して賢良方正の士を擧げたり。是に於て天下靡然として學に向ひ、董仲舒、孔安國、公孫弘等の大儒輩出せり。蓋し帝の儒學に於けるは、印度阿輸迦王の佛敎に於けるが如く、後世支那歷朝の政敎、必ず範を儒學に取るに至りしもの、實に此に基せり。當時また文章詞賦を以て有名なるもの多く、就中司馬遷(史記を撰す)、司馬相如等は、古今に傑出せり。之よりさき、文帝の朝に賈誼あり、亦文章を以て著はれき。

武帝の雄圖 武帝は、秦皇以來の英主にして、大に兵力を用ゐて、國威を輝したり。その在位五十餘年の間、南越を平げ、朝鮮を従へ、匈奴を逐ふ等、外征の事頻々たりき。



南越

南越 南越は、今の廣東安南地方なり。嘗て秦の始皇に征討せられて、其屬郡となりしが、秦亂るゝに及び、郡吏趙陀といふ者、自立して南越王と稱しき。武帝の時、南越王趙興(陀の孫)漢に内附せんと欲せしに、其相呂嘉可かず、遂に王を殺したり。因て武帝は、路博徳を將として、之を征せしめ、悉く其地方を平げて漢領せせり。帝は又兵を遣して、西南の蠻民(今の四川)を征服し、其地方を郡縣せしたり。

朝鮮

朝鮮 朝鮮は、國人の傳ふる所に依れば、開國の祖に、檀君といふ王ありきとの説あれども、其事蹟明ならず。周の時、箕子朝鮮に封ぜられ、王險に都しき。但し當時の朝鮮は、遼東の地方なり。其後子孫相繼ぎ、箕準の世に至り、燕人衛滿といふ者此國に來り、準を逐ひ、自立して朝鮮王となり。(漢の初頃)漸く領地を東南に拓き、朝鮮半島の北部を定め、都を平壤に遷したり。

衛滿

漢朝鮮を滅ぼす

朝鮮の四郡

武帝の時は、其孫衛右渠の世なりしが、漢の使者來りて朝貢を諭せども、應ぜず、反りて其使者を殺し、かば、武帝因りて諸將を遣し、衛氏を滅ぼして、朝鮮を漢領せし。眞番(鴨綠江流域)樂浪(大同江流域)臨屯(今の江原道)玄菟(今の咸鏡道)の四郡を置けり。而して朝鮮半島の南部は、當時馬韓(全羅、忠清、京畿三道の地)辰韓(慶尙道)辨韓(慶尙道)の三部に分れ居たり。

崇神天皇の世に我が國に來りて、辨韓の部なり

匈奴 冒頓單于

匈奴 秦の時、匈奴は將軍蒙恬に逐はれて、一時は遠く塞外に逃れ去りしが、冒頓(冒頓)といふもの、單于(天子の謂なり)たるに及び、東



東胡は満州族なり月氏はトチベツ族なり

衛青霍去病

大夏安息

は東胡(満州に居れり)を従へ、西は月氏(甘肅地方)を逐ひ、其勢甚だ盛にして、漢の時、屢邊境に寇したり。高祖大舉して、親征せしに、反つて平城に圍まれ、陳平の計によりて、纔に遁れ歸ることを得、尋いで婚を通じ、帛を贈りて、和親を結べり。是より匈奴漸く中國を侮る心を生じ、武帝の時に及び、又屢入寇を試みしかば、帝之を攘斥して、國辱を雪がんと欲し、衛青、霍去病を大將とし、大軍を發して、之を討たしめたり。二將善く戦ひ、屢匈奴を破りて、漠南の地を取り、後更に之を追窮して、砂漠を渡り、狼居胥山(外蒙古にあり)に至れり。是より匈奴遠く遁れて、漠南に全く其跡を絶ちたり。

西域諸國との交通 西域とは、今の支那土耳其斯坦より、葱嶺以西一帶の地方を總稱せるものなり。之よりさき戰國時代の末に、セリウカス王國(支那にては條)漸く衰へて、其版圖

大月氏

大宛康居等鳥孫身毒

張騫西域に使す

西域との交通

内に大夏、安息等勃興したり。然るに漢の初、月氏は匈奴の爲に逐はれ、遠く西走して、大夏に至り、之を滅ぼして、大月氏國を建つ。大月氏の北方には、大宛國(アフガニスタン地方)康居國(キルギスタン地方)あり。東南には、身毒國(印度)あり。大宛、康居の東方には、鳥孫國(伊犁地方)を始として、疏勒(喀什)、莎車(葉爾)、龜茲(庫車)、于寘(和田)等數多の小國ありき。

武帝は、匈奴征伐と同時に、張騫を大月氏國に遣して、共に匈奴を謀らしめんとせしに、驚途にて匈奴の爲に捉へられ、後逃れて遂に大月氏に往きしかば、要領を得ず。歸途再び匈奴に獲られ、かくて千辛萬苦の後、十三年を経て歸國し、具さに西域の風土人情等を奏上したり。其後匈奴の勢大に衰ふるに及びて、漢と、鳥孫、大宛、康居、大月氏、身毒等諸國との交通始めて開け、爾來西方の珍品奇物、漸く漢土に輸入し來れり。



武帝の晩年 武帝は、かく遠征を事とせし傍、神仙の説を信じて、頻に土木を起し、かば、國用多端にして前代よりの貯蓄も、悉く之を消費し、終には官爵を賣り、皮幣を造るの已むを得ざるに至り、尙ほ酷吏を用ゐて、課税を繁くし、民利を奪ひしかば、晩年に至り、天下漸く穩ならず、盜賊並び起れり。是に於て武帝頗る昨非を追悔し、詔を發して身を責め、苛政を除きしかば、幸に事なきを得たり。

第五節 漢の中葉

霍光の攝政 武帝死して、嗣子昭帝尙ほ幼なりしかば、霍光遺詔を奉じて、政を攝し、務めて民力の休養を計れり。  
宣帝 宣帝次いで立つ、英明にして、紀綱大に張れり。且内外の官吏、皆其人を得て、魏相、丙吉、黃覇、于定國等の賢宰相、政に

良地方官 任じ、趙廣漢、尹翁歸、龔遂等の良地方官、民治を掌りき。之よりさき烏孫は、漢と婚嫁を通じて、相親しかりしが、宣帝の時、匈奴屢烏孫を攻む。帝乃ち兵を發して、大に匈奴を破りぬ。この後匈奴は、五單于争立の亂を生じて、紛擾を極め、遂に鄯支、呼韓邪の二單于に分れ、呼韓邪單于是、漢に來降せしかば、鄯支單于是、叛服常なく、後に漢兵と戦ひて敗死せり。匈奴既に衰へ、漢の威大に西域に振へり。此際始めて西域都護の職を置きたり。  
宦官外戚 宣帝の後、元帝成帝の世には、宦官弘恭、石顯及び外戚王氏、相繼いで朝政を專にし、漢業漸く衰へぬ。

第六節 漢の中絶及び再興

王莽の篡奪 成帝より、二代を経て、平帝の時、王莽といふ者



孺子嬰  
漢室の中絶

政を攝し、自ら諸侯王の上に位し、且其女を納れて皇后とせり。王莽は、表面に恭儉を装ひ、次第に人望を収めたりしが、遂に其真相を顯はし、平帝を毒弑して、孺子嬰を立て、後又嬰を廢して、自ら位に上り、國を新と號せり。漢室是に於てか、一旦中絶しぬ。(皇紀六八六年)

劉縯劉秀  
劉玄

王莽の失政、群雄の蜂起。王莽既に漢祚を奪ひ、諸政を一新し、官名及び州縣の名稱境界を改定し、周制に倣ひて、井田の法を設け、又屢貨幣を改鑄する等、法令紛雜を極め、賦歛また重きを加へしかば、幾ならずして天下亂れ、赤眉(山東)、下江(楊州)、新市(湖北)、平林(同上)等の諸賊蜂起したり。既にして漢室の裔なる劉縯、劉秀、兄弟亦兵を起し、縯の同族なる劉玄を推して、皇帝とし、大に王莽の軍を昆陽(河南)に破れり。是に於て帝劉玄進みて長安に迫り、王莽を族誅せり。莽帝たるを、僅に十

王莽亡ぶ

五年にして亡びぬ。

東漢の光  
武皇帝

漢の中興。之よりさき帝劉玄は、劉縯を忌みて之を殺したり。而して劉秀の威名益盛にして、遂に諸將の勸によりて、帝位に即き、尋いで都を洛陽に定めぬ。之れを東漢の光武皇帝とす。(皇紀六八五年)眉長安を攻め取りて、帝劉玄を逐ひければ、光武帝は其臣鄧禹、馮異を遣して、赤眉を破り、更に諸將を遣して、所在群雄を平げしめたり。

光武の施政。光武帝即位の後、専ら意を内治に用ゐて、復た武事を言はず、學を興し、士を重んじ、諸功臣をして、皆終を全くせしめたり。されば西域の來りて、内附を求むるものありしかば、之を謝絶し、又匈奴の衰亂に乗じて、之を討滅せんことを請ふものありしかば、敢て聽さざりき。



第七節 東漢と匈奴及び西域

明帝 章帝 光武帝の後、明帝、章帝相繼ぎて立ち、明帝の明察は、章帝の寛厚と、前後相濟うて、内治よく整へり。但し此際外征の師、屢發せられたり。

耿秉 竇固 南北匈奴、西域諸國、班超の遠征。之よりさき、匈奴は、南北に分れ、南匈奴は漢と親みしが、北匈奴は西域諸國と相結びて、屢邊に寇したり。明帝の時、耿秉、竇固等の諸將、北匈奴を撃ち

班超西域に使す 伊吾廬(東部)に至れり。時に竇固の部將に、班超といふものあり、命を承けて鄯善(伊吾廬)に使い、匈奴の使者を斬りて、鄯善王を威服し、尋いで于闐、疎勒等を降し、かば、西域諸國風を望みて降を納れたり。明帝因りて其地に、都護及び戊己校尉を置けり。

大月氏の迦膩色迦 佛敎の東流 大月氏は、迦膩色迦王の時(東漢の初)國勢盛にして、

王 佛敎の南北兩派

其版圖中央亞細亞より、印度の西北部を包有せり。王は厚く佛敎を信じ、之が興隆を計れり。其頃より、佛敎は南北兩派に分れ、南派は小乘敎にして、師子國(錫蘭)を中心として、後印度及び南洋諸島に傳はり、北派は大乗敎にして、罽賓(ミカシユ)を中心として、西域諸國に行はるゝに至りぬ。明帝は蔡愔といふ者を罽賓に遣して、佛敎を求めしめしに、迦葉摩騰、竺法蘭の二僧、蔡愔に伴はれて、洛陽に來れり。帝因りて白馬寺を建て、二僧をして佛經の翻譯に従事せしめたり。是れより西僧支那に來るもの多く、佛敎次第に流行せり。

迦葉摩騰 竺法蘭

班超都護となる

班超の再征 章帝の時、西域叛して、都護を攻め殺しければ、班超請ひて、征服の任に當り、孤軍西域を横行して、連りに諸國を攻め降し、遂に五十餘國を擧げて、漢の隸屬となし、身都護の職を在ると前後三十年なりき。是に於て班超の威名、遠



近に振へり然れども班超の後、都護其人を得ずして、西域ま  
た全く叛き去りぬ。

羅馬と支  
那との交  
通

(安敦は  
蓋し「ア  
ントニウ  
ス、アウ  
レリウス」  
なり)  
烏桓  
鮮卑

「ハンス」

漢威方に葱嶺の東西に逼ねき時に當り、大秦國(羅馬帝國)は、頻に安息を破  
りて領土を西方亞細亞に拓きたり、班超其國の富強なるを聞き、部將甘英  
を遣りて、大秦に往かしめしかど、遂に達するに能はず、半途にして歸れり。  
然れども漢と大秦との交通は、後に至りて開け、桓帝(章帝より七代の後)の  
世に、太秦王(安息)は、海路より使を發し、安南地方に於て通商せしめたり。こ  
の時は、我が國にては、成務天皇の世に當れり。

**鮮卑の強大** 東胡は、秦漢の際、匈奴に破られて、烏桓、鮮卑の  
二部に分れき。班超の遠征以來、北匈奴大に衰へ、部衆解體し  
て、或は遠く西方に逃れ、或は漢に歸降せり。是より鮮卑代り  
て、其地を占有し、漸く強大となれり。後年歐洲史上に現はる  
「ハンス」は、此北匈奴の裔なりといふ。

第八節 東漢の末葉

外戚宦官

名士李膺  
等

竇武陳蕃

張角

**外戚宦官の專横** 章帝の後、代々の皇帝、多くは幼弱にして、  
外戚宦官、更るゝ政權を握り、桓帝に至り、宦者單超と謀り  
て、外戚梁氏を滅ぼし、より、宦官の跋扈特に甚しきを加へ、  
在野の志士之を憤りて、有名なる黨人の獄こゝに起りぬ。  
**黨人の獄** 當時李膺、范滂、郭泰、杜密等の名士あり、大學の諸  
生を率ゐて、時政を議し、宦官を誹りしかば、宦官怒りて、李膺  
以下二百餘人を禁錮したり。桓帝死して靈帝立つに及び、外  
祖竇武、大將軍に住じ、陳蕃、大傅たり。竇武、陳蕃は宦官の反對  
者にして、李膺等を朝に列せしめ、相謀りて、宦官の徒を誅せ  
んこせしに、事漏れ、反りて宦官の爲に、死徒廢禁の禍にあふ  
もの數百人なりき。  
**黄巾の賊** 時に鉅鹿に、張角といふ者あり、妖術を以て愚民



を惑はし、徒を聚めて、亂を作せり。之を黃巾の賊といふ。幾もなくこの亂平定せしかば、是れより盜賊多く起りて、海内穩ならず、宦官の專恣亦益增長したり。靈帝の後太子辨立つに及び、袁紹といふ者、宦官を族誅せしに、董卓といふ者、亦大兵を擁して、洛陽に來り、辨を廢し、紹を逐ひ、擅に獻帝を立て、政柄を握れり。

袁紹と卓董

群雄起る

是に於て關東の州郡、争うて兵を擧げ、董卓を討たんこせしかば、卓乃ち之を避けて、都を長安に遷し、尋いで其下のため殺されたり。是れより天下大に亂れて、袁紹(直隸山西の間)公孫瓚(直隸南河)曹操(南河)劉表(北湖)孫堅(南湖)等の群雄、並び起れり。曹操 既にして袁紹は、公孫瓚を滅ぼし、勢に乗じて、曹操を攻めしに、軍利あらずして死し、袁術亦敗死したりしかば、中原の過半は、曹操の有となり、且操は早くも獻帝を挾みて、

曹操

劉備

(洛陽)に都しければ、其勢力俄に強大となりぬ。

劉備 漢室の裔に、劉備といふものあり、關羽、張飛等と共に、漢室の挽回を期せしかば、力少くして獨立する能はず、諸方に流寓せしかば、曹操のために追はれて、遂に荊州の劉表に身を寄せたり。この時備は、草廬に三顧して、名臣諸葛亮を得たり。劉表死するに及び、其子琮、荊州を擧げて、曹操に降りしかば、備また東に奔りて、援を吳の孫權に求めぬ。孫權は孫堅の子なり、之よりさき孫堅死し、其子孫策勇武にして、江東を平げ、吳の地に據れり。沈勇なる孫權、兄の後を承けて、益勢力を盛にせしが、備の來り投ずるに及び、輒ち之を納れたり。さて曹操は、八十萬の大軍を以て、備を逐ひ、江を下り來りしが、吳の名將周瑜、僅に三萬の兵を以て、大に之を赤壁(武昌の西)に破りぬ。備乃ち荊州を取り、關羽を留めて、之を守らしめ、自ら

孫策孫權

諸葛亮

赤壁の戦  
周瑜











東漢の滅亡  
魏の文帝

蜀の昭烈帝

吳の太帝

蜀の後皇帝  
諸葛亮

司馬懿

操死して、其子曹丕嗣ぐに及び、遂に獻帝に迫りて、位を禪らしめたり、之を魏の高祖文帝とす。(皇紀八八〇年)

曹丕篡立の翌年、劉備亦成都(四川省)に於て、帝位に即ぐ、之を蜀漢の昭烈皇帝とす。後八年、孫權亦建業(今南京)に即位す、之を吳の太祖太帝とす。

諸葛亮、蜀の滅亡。昭烈帝は、關羽の爲に、仇を復せんを欲して、吳を親征せしが、反りて大敗せり。後吳蜀和成り、尋ぎて昭烈帝死して、後皇帝位を嗣げり。

諸葛亮は、後皇帝を輔佐し、先づ内政を整へ、南夷を平げ、然る後北征して、魏を攻むると前後三回に及べり。亮出陣すと聞くと、魏の郡縣震駭せざるなく、魏の名將司馬懿も、敢て出で戦はざりき。かくて亮病に罹りて、陣中に歿せしより、爾後蜀の勢復た振はず、魏の將鍾會、鄧艾、路を分ちて、來り攻むるに

蜀亡ぶ

出師表

司馬炎  
魏亡ぶ

及び、蜀軍連敗して、後皇帝出で降りぬ。

三國の形勢を考ふるに、魏は天下の過半を有して、勢力最も強く、吳は長江の險を控へて、勇將謀臣乏しからず、獨り蜀は、西南に偏在して、地小に、人寡きにも關らず、能く魏吳と對峙して、相讓らざりしは、畢竟諸葛亮の力に依れり。其出陣に臨み、後皇帝に上つりたる書は、世に名高き出師表にして、前後二回あり、至誠忠烈、讀む者をして感泣せしむ。

魏の滅亡。魏は、文帝の後明帝之に繼ぐ。司馬懿丞相となりて、政權を握れり。其二子師、昭、兄弟相尋ぎて、威を弄び、明帝の後、廢立を行ふと二回。(師は帝弟を廢す、昭は帝弟を廢す)以て元帝に至れり。蜀の滅亡は、即ち元帝の下にて、司馬昭晉王となりて、威を振へる時に在りき。昭の子炎、遂に元帝より禪を受けて、帝位に上れり、之を晉の世祖武皇帝とす。

吳の滅亡。吳は、太帝より三傳して、帝皓に至れり。皓即位の



吳亡ぶ  
年は、即ち蜀滅亡の年なり。皓不徳にして、國政亂れ、晉の將杜預、王濬等、破竹の勢を以て、來り攻むるに及び、皓狼狽して出で降りぬ。(皇紀四年九)

### 第二節 朝鮮の形勢

滿州諸族の南侵  
朝鮮の三國 魏吳蜀鼎立の頃、朝鮮半島も亦高句麗、新羅、百濟の三國に分れたり。こゝに其建立の由來を尋ねん。漢武の衛氏を滅ぼして、眞番、臨屯、樂浪、玄菟の四郡を置きしより、半島の北半、漢の支配を受くること、凡そ五十餘年なり。然れども其地甚隔絶せるを以て、漢廷素より深く意を留めず、政教漸く亂れしかば、滿州地方の諸族、續々侵入し來りて、穢貊は玄菟郡の南部を占め、沃沮は其北部に住し、更に其北方滿州に跨りて、最有力なる扶餘國ありき。

高句麗

新羅及び百濟

新羅日本  
の屬國と  
なる

扶餘國の王子に、高朱蒙といふものあり、國難を避け、南に移りて、新に王業を創め、(皇紀六二四年即ち漢の成帝の時)子孫數世の間、漸く近傍諸族を從へて、終には其版圖滿州東部より、咸鏡平安江原、黃海諸道に跨るに至れり。是れ即ち高句麗國の祖なり。高句麗の建國に先だつこと二十年、朴赫居世といふもの、辰韓に起り、辰辨二韓を併せて、新羅國を立て、高句麗の建國に後るゝこと二十年、高温祚(高朱蒙の子)といふもの、馬韓に入り、其地を平定して、百濟國を創めたり。以上三國の外、新羅の南方なる任那は、夙に日本に隸屬したり。新羅と日本 新羅は、一に雞林と稱せり。第十代奈解王に至り、(東漢獻帝の世)日本神功皇后の征伐を受けて、之が屬國となれり。然れども、叛服常なく、屢日本に抵抗して、終には日本領なる任那をさへ併呑し、又屢百濟と戦へり。



我が國の應神天皇は晉の武帝と同じく、天の皇子として、阿直岐の王仁及び朝鮮の來朝せり。高句麗は日本との關係少し。

百濟と日本 新羅と同時に、百濟も亦日本に朝貢し、爾來日本との關係最親密にして、使聘常に往來し、儒學佛教工藝等の日本に傳はりしも、多くは百濟よりせり。又百濟は、始終日本に忠實にして、常に其保護に依頼し、時々新羅と争ひ、又屢高句麗と戦ひて、互に勝敗ありき。高句麗と日本支那 高句麗も、一時は日本に朝貢せしことありしが、地遠きを以て、其關係自ら疎なりき。然れども支那とは、境土相接せるを以て、漢、魏、晉に對し、平和に、戦争に、種々の關係頗る多く、又百濟とは、屢干戈を交へたり。

### 第三節 晉の衰亂

武帝の失政 晉の武帝は、失政を重ねたり。初め三國の亂に乗じて、戎狄の内地に雜居するもの多かりしかば、郭欽上書

武帝の失政

して、之を攘はんことを請ひしかば、武帝聽かず、遂に他日の禍を貽したり。武帝は又大に宗族を封じて、藩屏となさんごせしに、反りて骨肉相賊ふの基を作るに至り、加之吳を滅ぼしてよりは、心漸く驕りて、州縣の武備を撤去し、且酒色に耽りて、外戚奸臣の専恣を長じたり。されば晉室は、其創業の日に於て、早く已に衰亂の兆を現せりといふべし。

八王の亂

八王の亂、清談の流行 惠帝次いで立つ。皇后賈氏は、帝の暗愚を利として、朝廷を亂し、汝南王亮、楚王瑋、趙王倫、齊王冏、成都王穎、河間王顒、長沙王乂、東海王越の諸王、交も起ちて、政權を争ひ、骨肉相鬪ふと多年に亘れり。之を八王の亂といふ。加ふるに當時清談といふ一種の風流行して、天下の士大夫禮法を輕蔑し、世事を抛擲するもの多く、爲に一層國運の衰微を早めたり。

清談



竹林の七賢

清談の風は玄妙空虚なる議論を喜びて、禮法實務を卑み國を忘れ世を外にして無頓着に生を送るの謂にして所謂竹林の七賢山濤嵇康阮籍阮咸向秀王戎劉伶は其尤なるものなり蓋し佛老二學の隆盛と漢末以來打續きたる亂世とは天下の士大夫を驅りてかゝる厭世家たらしめし重なる原因なり。

劉淵

晉室の中絶及び再興 此際戎狄の間に崛起して群雄の魁をなし、ものを劉淵とす淵は南匈奴の裔にして勇武絶倫なり衆に推されて大單于となり都を平陽(山西)に定めて漢帝と號したり其子聰其族曜其將石勒等何れも一世の人傑たり同時に氏族の李雄といふもの亦蜀に據りて成帝と稱せり。

既にして劉淵の子聰位を嗣ぎ晉を攻むると甚だ急なり愍帝出で降り四世五十二年にして晉室中絶せり(皇紀九年)然れ

李雄

琅琊王睿

ごも其翌年琅琊王睿(司馬懿の曾孫)建業に即位して晉祚を繼げり之を東晉の元帝となす。

東晉

五胡十六國

元帝以後東晉の領地は殆ど江南一帯の地に過ぎず江北の狀況は紛然として所謂五胡(匈奴、鮮卑、羯、氐、羌)十六國(二趙三秦四燕五凉成夏)の亂となり百餘年間吞噬攘奪の禍已む時なかりき。

#### 第四節 東晉と諸胡

東晉の内亂 東晉にては元帝明帝成帝康帝の四君相繼ぎて立ち王導祖逖陶侃庾亮等文武の士輩出して國勢の恢復を圖りしかご前には王敦の亂あり後には蘇峻の反ありて力を江北に伸ばすこと能はざりき。

王敦蘇峻

二趙及び前燕の興亡符秦の強大 此間江北にては漢主劉聰死して劉曜代り立ち都を長安に遷して國號を趙と改め



石勒 冉閔

しが、石勒別に自立して、國を後趙と號し、劉曜を滅ぼして、前趙を併せたり。石勒死するに及び、其臣冉閔は、後趙を倒して、魏を立てしが、幾もなく、燕の爲に滅ぼされたり。

符堅 王猛

燕は慕容皝の建つる所にして、二趙相争へる頃より強大となり、遂に冉魏を滅ぼして、鄴(河南)に都し、帝號を稱せり。同時に涼、代、秦の三國起り、就中符秦最も強大なり。符氏は、氏人種に屬せり、符健といふもの、長安に入りて、秦帝と號し、姪符堅立つに及び、王猛といふ人傑を擢用して、國勢日に張り、燕を滅ぼし、涼を平げ、代を降し、殆ど江北を統一せり。

桓温と謝安

之よりさき東晉は、康帝死して穆帝の世となり、桓温といふもの、軍事を統へたり。温人となり、豪宕不羈にして、功名の心に富み、屢北征して、蜀を滅ぼし、秦を伐ち、威望甚盛なりしが、其後燕を伐ちて、敗れ歸り、名聲頓に挫けぬ。武

桓温の不臣 謝安の執政

帝の時、桓温竊に不臣の企てを爲し、かど賢臣謝安の爲に妨げられ、意を果さずして、病歿したり。こゝに於て謝安政を執り、江南事なく、晉室安泰なりき。これ方に符秦が江北を一統して、全盛を極めたる時なり。

肥水の戦

時に秦の謀臣王猛既に死し、秦王符堅は、自國の強大を恃みて、歩騎八十七萬を引率して、晉を親征せり。謝安の姪謝玄、精兵八萬を以て、秦の大軍を肥水(安徽)に逆へ撃ちて、大に之を破り、符堅纔に身を以て免れ歸りぬ。

江北の瓦解

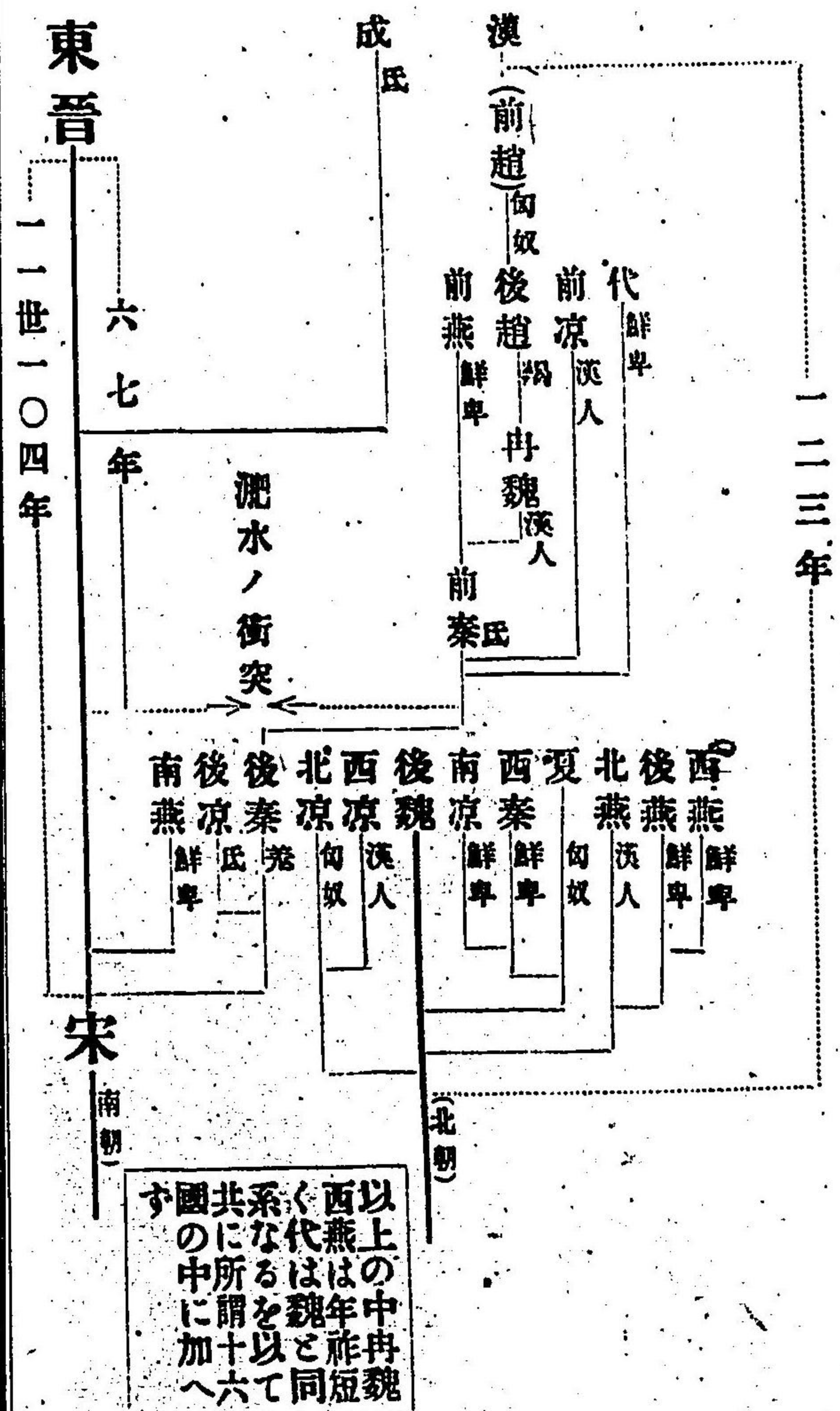
肥水戦後の江北 肥水の戦後、江北忽ち瓦解して、後燕、西燕、後秦、後涼、後魏等の諸國起り、符堅は、西燕と戦ひて敗走し、終に後秦の爲に滅ばされぬ。既にして南燕、西涼、南凉、北凉、夏、北燕等相尋ぎて國を立て、一盛一衰、一起一仆、江北の紛亂、此に至りて其極に達し、結局後魏の爲に一統せられたり。(皇紀九一〇)

後魏の一統



年)今一々其盛衰興亡を叙するも、徒に錯雜して、反りて要領を失ふの恐れあれば、左表を掲げ、以て其大勢を會得せしむ。

五胡十六國興亡表



劉裕の武功

晉の滅亡

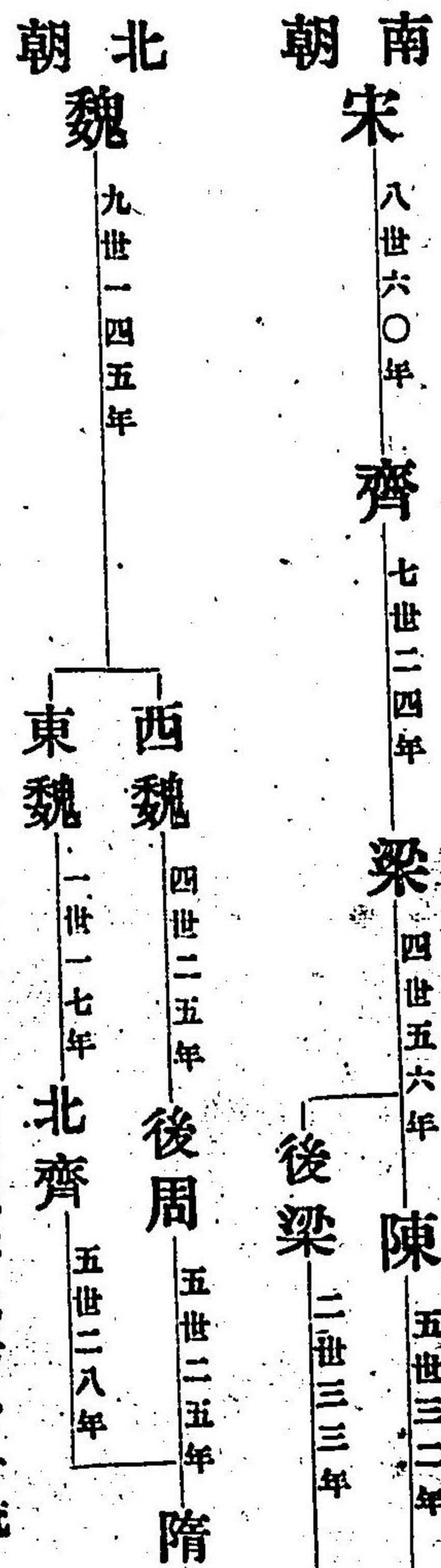
南北朝の沿革

肥水戦後の江南 江南にては、謝安職を去り、武帝政を怠りて、會稽王父子權を專にせしが、安帝嗣ぎ立つに及び、内亂起りて、父子共に賊手に斃れたり。此内亂を戡定して、大權を掌握したるものを劉裕とす。裕は夙に軍旅に従事して、武名高く、内亂を定めたる後、更に北征して、南燕を滅ぼし、後秦を平げ、漸く不臣の志を懷き、遂に安帝を弑して、恭帝を立て、尋いで其位を奪ひて、自立せり。(皇紀一〇八〇年)之を宋の高祖武帝と稱し、以後を南北朝時代とす。

第五節 南北朝の變遷

南北朝 南北朝も、亦前代に譲らざるほどの亂世なれば、先づ兩朝沿革の大勢を表示して、然る後其間の出來事を述べん。





宋既に東晉に代り、之に後る、と十九年にして、後魏亦北方を一統し、南北對立して、海内尙靜平に歸せざると、更に百五十六年、此間南北各二十四君を出し、其中終を令くせしもの、南朝にては、十君にして、北朝にては、十四君あるのみ、以て其如何に亂逆の時代なるかを推知すべし。

**南朝宋の興亡** 宋は、武帝より二傳して、文帝に至る。時に魏の太武帝、北方を一統せり。宋の文帝、漫に北征の師を發して、河南を侵し、かば、太武帝逆へ撃りて、大に之を破り、魏軍長驅して、奪掠を恣にし、沿道爲に荒廢を極めたり。爾後宋の國運漸く衰へて、弒逆相尋ぎ、權臣蕭道成、威を逞しくして、遂に

宋亡ぶ

北朝魏

孝文帝の治

帝位を篡へり、之を齊の太祖高皇帝となす。

**北朝魏** 魏建國の祖を、拓拔珪といふ。太武帝は、第三代に當り、宋の亡びし頃は、太武帝より三傳して、孝文帝位に在り。帝聰明にして、文治を崇び、胡俗胡語を禁じて、制度風俗漢人に則り、都を洛陽に遷して、文物憲章粲然たり。此時姓を元氏と改められたれば、元魏の稱之より起れり。然れども帝の改革、稍極端に失して、不平の徒亦少からざりき。

南朝齊

蕭衍

齊亡ぶ

北朝

爾朱榮

**南朝齊の興亡** 南朝にては、齊の太祖卽位の後、幾もなくして死し、五傳して、寶卷帝に至り、昏虐にして、内亂大に起りしが、蕭衍といふもの、帝を弒し、内亂を定めて、和帝を立て、後迫りて帝位を篡へり、之を梁の高祖武帝となす。

**北朝魏の内亂** 北朝にては、魏の孝文帝より、二傳して、孝明帝に至り、胡太后帝を怨みて、之を毒殺しければ、將軍爾朱榮



兵を擧げて太后を弑し、孝莊帝を擁立せり。然るに榮漸く專横なり、よりて孝莊帝之を誅せしに、榮の黨、また帝を弑し、内亂大に起れり。是に於て高歡といふもの、兵を擧げて、爾朱氏の黨を平げ、孝武帝を迎へ立てたり。後孝武帝は、歡と讐を生じ、長安に出奔して、關西の大都督宇文泰に頼り、歡は別に孝靜帝を洛陽に擁立せり。(皇紀一一九四年)是より魏東西に分れ、高歡、宇文泰、互に雄を争ふことなれり。

**南朝梁の興亡** 兩魏相争ふの間、南朝事なきこと四十餘年、文教漸く興れり。然れども梁の武帝は、晩年に至り佛法に耽るの餘、政を怠り、武備を忘れて、遂に侯景の亂を醸せり。初め侯景は、東魏より梁に降りて、王に封ぜられ、武帝の爲に東魏を攻めしが、後東魏と梁と和するに及び、侯景疑懼して、反旗を擧げ、國都建康(建業に)を陥れて、武帝を幽殺し、簡文帝を立て、

魏二分す  
高歡宇文泰  
南朝梁  
梁の内亂  
侯景

て、尋いで、帝を弑して自立したり。因りて皇弟湘東王は、陳霸先、王僧辨と共に景を誅して、帝位に上れり。之を元帝とす。幾もなく西魏來攻して、元帝を虜にし、岳陽王を江陵に立て、後梁の宣帝とせしかば、霸先、僧辨、別に敬帝を建康に擁立せり。其後霸先は、僧辨を殺し、敬帝に迫りて、帝位を篡へり。之を陳の高祖武皇帝とす。

**南北朝の絶滅** 陳の篡立に先だつこと七年、高歡の子高洋、東魏を篡して、國を齊と號し、陳の篡立と同年、宇文泰の子宇文覺、西魏を篡して、國を周と號せしが、其第三代武帝に至り、遂に齊を滅ぼして、北方を一統せり。武帝より一代を経て、靜帝に至り、外戚楊堅、隋王となりて、政を執り、遂に周祚を篡へり。之を隋の高祖文帝とす。其後文帝は、後梁を伐ちて之を滅ぼし、後二年陳を併せて、天下始めて一に歸せり。(皇紀一二四九年)

西魏の來  
陳霸先  
梁亡ぶ  
兩魏亡ぶ  
齊周代る  
北方の一統  
楊堅  
陳亡ぶ  
隋の一統



第六節 當代支那の學藝宗教

訓詁の學

一、儒學 漢武以來儒學は、諸他の學派を排して、獨り興隆の運に向ひ、學者専ら經義の講究に従事し、専門の學統を傳ふ之を訓詁の學といひ、後漢の名儒馬融、鄭玄等の力により、此學益盛にして、魏晉の際には、王肅、王弼、何晏、杜預等の學者輩出せり。然れども東晉以後、名儒寡く、儒學は國運と共に分岐紛亂して、大に其統一を缺きたり。

六朝の文弊

二、文藝 戰國秦漢の際に發達したる文章詩賦は、魏晉南北朝を通じて、盛に行はれたり。然れども文章に於ては、徒に辭句の潤飾にのみ力を費して、精神氣力に乏しき弊を生じ、所謂駢儷文大に流行して、浮華纖弱に陥りたり。されば六朝(梁宋齊陳)の間、散文として觀るべきもの極めて少く、謹嚴莊重な

詩賦の名家

陶淵明等

書畫の發達

王羲之等

る出師表は、實に當代有數の文字といふべし。詩賦にては、晉の陶淵明、謝靈運、陸機、梁の沈約、徐陵、庾信等最も著はる。音韻學(平上去入)の研究亦南北朝の際に起れり。書畫も漢魏の際に發達し、晉に至りて、書には王羲之といふ大家を出し、畫には顧愷之といふ名手を出したり。

佛教の隆運

達磨

欽明天皇の十三年(皇紀一)

三、佛教 佛教は、兩晉の際に至り、支那に盛行せり。此頃佛圖澄は印度より、鳩摩羅什は龜茲(天山)より來り、道安、慧遠、法顯は、支那に出で、殊に鳩摩羅什は、後秦帝の尊信を受けて、佛經數百卷を譯出し、法顯は、十餘年間印度を歴遊して、佛典を齎し歸りたるを以て名高し。南北朝に至りては、法運益盛にして、諸種の宗派を生じ、彼禪宗に名高き菩提達磨も、梁の武帝の時支那に來れり。又佛教の朝鮮日本に入りしは、此時代にして、前秦は之を高句麗新羅に傳へ、百濟は之を東晉より受



けて、日本に傳へたり。

二一三年に百濟より我國に佛像を獻じ來り

第七節 中央亞細亞の形勢

波斯及び嚙噠 嘗て中央亞細亞に勃興したりし安息國は、

安息國は波斯興る

東漢の中葉頃より衰へて、遂に波斯人の爲に滅ぼされぬ。

大月氏の滅亡

代時)是より波斯王國、中央亞細亞に威を振へり、又大月氏も、迦

膩色迦王以後、漸く勢力を失ひ、嚙噠(蓋し土耳古族なり)代りて、其地

を領し、(東晉の末)頻に干戈を用ゐて、四隣を征服し、其版圖南は印

度河口より、北はシル河に至り、西は波斯を壓して、東は天山

南路に及べり。然れども百餘年を経て、其勢衰へ、遂に突厥の

爲に併吞せられたり。(南朝陳の初頃)

柔然、吐谷渾、突厥 初め兩晉の際、諸胡中國に亂入して、國を

建てし間、塞外にありて最有力なりし種族二あり。一は柔然

柔然吐谷渾

の匈奴)にして、漠北一帯の地を占め、一は吐谷渾(鮮卑の一種)にして、

青海地方に據り、各威を逞しうして、常に元魏の患を爲し、

が、魏の東西に分るゝ頃、柔然の部族に突厥といふもの、次第

に勢力を得、酋長木杆可汗に至り、遂に柔然を滅ぼし、(南朝梁の末年)

尋いで嚙噠を降し、吐谷渾を従へたり。是れに於て突厥の領

土、東は滿州より、西はアラル海に及び、北は貝加爾湖を包み

て、南は青海を併せ、尠然たる一大國を現出するに至りぬ。幾

もなく木杆可汗は、其領地の大に過ぐるを以て、從弟達頭可

汗をして、其西半を統へしめ、突厥はより東西に分れたり。當

時波斯は、サ、ン王朝の、ユスロース第一世位に在りて、東羅

馬帝、シヤスナニアンと交戦頻りなりしかば、西突厥は遠く

使を東羅馬に遣し、東西相應じて、屢波斯を苦め、漸く領土を

西境に拓きたり。又東突厥は、屢中國に寇して、北朝の後周を

突厥の全盛

東西の突厥



惱まし、が隋の中國を統一するに及び、之を好を通じて、親交を結べり。

「ジャスチニアン」帝の時、養蠶の業始めて東歐に起れり。蓋し蠶は、當初商人等、其傳を忌みて、秘密に付せしを以て、歐洲の人々は、皆絹を以て、綿の如く植物産のものなりと思へり。然るに皇紀一二〇〇年の頃、支那にては南朝梁の時代、東羅馬の僧侶二人、支那に來り、産卵を其杖中に收めて、齎し歸りしかば、是れより養蠶の業、東羅馬帝國內に行はれ、就中「サイブラス」島、西々里島及び希臘南部に於て、最も盛なるに至りきといふ。

### 重要事蹟年表

神功	皇	后	應神	天皇	仁德	天皇	允恭	天皇	雄略	天皇
八八六	八九四	九二五	九四〇	九六四	九七六	九七七	一〇四三	一〇八〇	一〇九九	一一三九
文魏帝	明魏帝	元魏帝	武晉帝	上同	燕晉帝	愍晉帝	元東晉帝	東晉帝	宋武帝	高齊帝
波斯安息を滅ぼす	蜀の諸葛亮死す	蜀亡ぶ	魏亡ぶ	吳亡ぶ	劉淵は漢帝と李雄は成帝と號す	晉の中絶	晉室の再興	肥水の戰	東晉亡ぶ	元魏の太武帝江北を一統す 支那は宋魏に兩分せり
宋亡ぶ										



第三章 魏晉南北朝時代

天用明 皇	欽	明	天	安開 天	繼體 天	武烈 天
一二四九 文隋帝	一二一七 武陳帝	一二二〇頃 文陳帝	一一九四 上同	一一八七 上同	一一六二 武梁帝	一一六二 武梁帝
陳亡ぶ 隋支那を一統す	梁亡ぶ	突厥嚙噠を滅ぼす	突厥柔然を滅ぼす	元魏東西に分る	菩提達磨支那に来る	齊亡ぶ
		「モハメッド」阿刺比亞に生る				

第四章 隋唐時代(皇紀一二四九年より一五六七年まで)

此時代は、凡そ三百餘年の間にして、我が崇峻天皇より醍醐天皇までの時代に當り、此間、日本支那間の國交始めて開けて、支那の文物盛に日本に傳はれり、而して漢族は、こゝに再び勢力を恢復し、悉く四邊の諸族を威服して版圖の大文化の盛實に前代未聞の有様となれり、左に漢族革命の大勢を示す。

隋 三世三七年 唐 二〇世 二九〇年 梁

第一節 隋の煬帝

煬帝の豪華及び外征 隋の文帝勤儉にして、仁政を行ひ、海内殷富にして、戸口蕃息せしかば、其子煬帝代り立つに及び、奢侈豪遊を好み、大に宮室苑囿を營み、長安より、江都(江蘇省)に至るまで、離宮四十餘箇所、一として莊麗ならざるはなく、

煬帝の豪華  
離宮四十餘ヶ所



此時推古天皇小野妹子を附へり給ふに遺し給ふ征煬帝の外

李淵 世民

又通濟渠(河淮間)刊溝(淮江間)永濟渠(河白河間)江南河(江杭州間)等の溝渠を穿ち、萬里の長城を修築する等、土木頻に興り、巡遊虛歲なかりしかば、下民役に苦むもの數十百萬、丁男足らずして、婦人を役するに至り、怨嗟の聲四方に起れり。帝又外征を事とし、南は林邑を平げ、西は吐谷渾等を従へて、遠く西域諸國に使聘を通じ、東は高句麗を親征し、又始めて日本と交通せり。

群雄の蜂起 既にして天下の人心漸く隋室を離れ、竇建徳、李密を初めとして、群雄の蜂起するもの前後十數人、皆皇帝或は王公の號を僭せり、而して群雄中先づ長安に入りて、天下の大勢を定めしものを、唐公李淵とす。淵人となり、寛厚にして、初め事を擧ぐるに意なかりしが、次子世民、英武にして、大志あり、切に父に勸めて、兵を擧げしめ、援を突厥に假りて、

隋亡ぶ

唐の高祖

直に長安を取り、當時江都に在りける煬帝を遙に尊びて、太上皇となし、別に隋の皇族を迎へ立て、恭帝とせり。淵功を以て唐王に封ぜられ、尋いで禪を受く、唐の高祖神堯皇帝是れなり。(皇紀一七七八年)

### 第二節 唐初の内治及び制度

世民の武功

世民の武功 高祖李淵即位の年、宇文化及といふもの、煬帝を江都に弒して、自立し、其他群雄の唐に従はざるもの、なほ甚多かりき。世民乃ち李靖、李世勣等と共に征討に従事する。ここ七年にして、海内始めて平定せり。既にして世民位を嗣ぐ、之を太宗文武皇帝となす。

太宗の治世 太宗英邁にして、勤儉自ら奉じ、仁慈下に臨み、文學を勵まし、武備を嚴にし、吐如晦、房玄齡、内に相となり、李

此時舒明天皇犬上御田鎌を唐に遺し



給へり  
杜如晦房  
玄齡等  
貞觀の治  
孝徳天皇  
の太化元  
年の貞觀  
九年に當  
り我國改  
新の大化  
の事あり  
官制

田制税法

靖李世勣外に將となり、魏徵、王珪善く諫め、其他文武の名臣朝に列して、國威遠く異域に輝き、制度文物よく整備したり。年號によりて、之を貞觀の治と稱す。こゝに當代制度の一斑を述べん。

**(官制)** 最貴の官を三公(大尉司)とし、位尊く職曠しくして、常置の官にあらず。萬機の政は、尙書、中書、門下の三省、之を總理し、就中尙書省最も尊くして、吏、戶、禮、兵、刑、工の六部、之に隸す。三省の外に、秘書、殿中、内侍の三省あり。又御史臺及九寺(太常、光祿、衛尉、宗正、太僕、太)ありて、各分掌する所あり。又地方には、府に(理、鴻臚、司農、太府)ありて、民治を掌り、都督府ありて、軍事を牧、州に刺史、縣に令ありて、民治を掌り、都督府ありて、軍事を統へ、都護府ありて、諸藩を撫したり。

**(田制税法)** 高祖の時、均田、租庸調の法を定む。凡そ丁中(十六以上六十歳迄を丁とす)には、田百畝を給し、病者、妻妾亦各給す。

兵制

法制

學制

る所あり。死すれば則ち之を收む。租は、田百畝より、粟二石を出し、庸は、歳に二十日役に就き、調は、郷土の物産を上る。皆歳の豊凶によりて、斟酌する所ありき。

**(兵制)** 全國を十道に分ち、六百三十四府を置き、府兵の制を定む。二十歳以上六十歳以下を服役期とし、宿衛に當るものは、兵部に勤番せしめ、其餘は平時耕作に従事し、毎年季冬各府に召集して、戰を習はし、事ある時は、契符を下して、徵集す。隊の編成は、十人を火、火五を隊、隊六を團とせり。

**(法制)** 五刑、十二律あり。五刑とは笞、杖、徒、流、死にして、笞、杖、徒の三刑は、五等に分れ、流刑には三等、死刑には二等あり。

**(學制)** 京師に、國子學、大學、四門學、律學、書學、算學等の學校あり。各府州縣、亦學校を設く。太宗の時、更に弘文、崇文、二館を設く。士を取るの法三あり、學館よりするを生徒といひ、州縣よ



りするを郷貢といひ、有司之を試験して、登第者には進士、明經等の學位を與ふ。この外に、制舉とて、天子親ら試むるの特制あり。

### 第三節 唐初の外政 東西突厥 朝鮮

東突厥  
始畢可汗

東突厥の滅亡 木杆可汗の下に強大となりたる東突厥は、一時内亂を生ぜしが、始畢可汗、主となるに及び、國勢復た盛に興れり。唐の高祖は、實に其援を假りて、以て大業を成したれば、唐の東突厥を遇すること、極めて厚く、始畢の死せし時の如き、高祖爲に哀を擧げて、朝を廢すること三日なりき。始畢より一世を経て、頡利可汗立ち、唐の優待に狃れて、屢來寇し、且失政多くして、大に人心を失ひければ、鐵勒部内の回紇、薛延陀諸族は、叛旗を翻へすに至りぬ。唐の太宗之を聞き、李

回紇薛延陀

太宗高句麗を征伐す

百濟亡ぶ  
高句麗亡ぶ

靖、李世勣を將とし、突厥を破りて、頡利を擒にしたり。東突厥こゝに亡び、次いで回紇等の諸部皆唐に降りぬ。  
太宗と高句麗 初め朝鮮半島にては、麗、濟、羅三國久しく鼎立して、相争ひしが、唐起るに及び、新羅之と好を修めしかば、麗、濟、二國同盟して、新羅を攻め、其唐に入貢するの路を塞げり。太宗乃ち高句麗を攻め、遼東に進みしかば、城堅くして拔けず、空しく師をかへすに至れり。

朝鮮三國と日本唐 太宗死して高宗立つに及び、麗、濟、相結びて、再び新羅を攻めければ、高宗水陸の軍を發して、百濟を撃ち、國王父子を擒にしたり。時に百濟の王子豊、日本に質たりしが、遺臣福信等之を迎へ立て、恢復を圖り、日本亦爲に援兵を出し、其甲斐なく、百濟全く滅亡せり。(皇紀一三三)後五年を経て、高句麗亦唐將李世勣の爲に攻滅ばされしかば、



百濟亡び  
て天智天  
皇は朝鮮  
半島に對  
して全く  
干渉を絶  
ち給へり

朝鮮半島は、半は唐に隸し、半は新羅に屬することなれり。而して新羅は、陽に唐を尊びて、臣禮を執りしかば、徐々に唐領を蠶食して、境土を拓き、又日本に對しては、何等國際上の關係もなきに至れり。

西突厥の瓦解 此頃西突厥亂れて、衰微しければ、高宗將を遣じて之を擊破したり。是より西突厥瓦解して、復た振はず。唐領大に西方に擴がれり。然れども當時阿刺比亞人の勢力方に熾にして、葱嶺以西の地は、忽ち其手に落ちたり。(第六節 參照)

### 第四節 武韋の禍

唐の疆域 高宗の世に至り、唐の叛圖、東は朝鮮より、西は、ヒンヅークーシュ山に至り、南は林邑を包みて、北は内外蒙古を併せたり。漢族の勢力斯く強大となれるは、實に空前絶後

といふべし。然るに此盛時に當りて、一變事は宮廷の間に起れり。

武后

武后の禍 初め太宗の死するや、才人武氏剃髮して尼となりしに、高宗再び之を宮に納れ、遂に立て、皇后とせり。武后明敏にして、才學あり。高宗病むに及び、萬機一に武後に決せり。既にして高宗死し、中宗位に即きしが、武后之を廢し、其弟睿宗を立てたり。尋いで大に唐の宗室を殺し、睿宗を廢して、自ら帝位に上り、名を墨國を周と號せり。(皇紀一三 五〇年)

唐の中絶

唐の復興

墨權略ありて、善く人を用ゐしかば、魏元忠、婁師德、狄仁傑等の名臣朝に列したり。就中狄仁傑、最重んぜられき。仁傑死して、其推薦に係れる張柬之相たりしが、墨病むに及び、柬之兵を發して、奸黨を斬り、中宗を迎へ立て、唐室を復興したり。  
韋氏の禍 中宗位に復し、妃韋氏を立て、皇后となせり。韋

韋氏



氏權を專にし、陰に武三思と謀りて、張柬之を誣殺し、後遂に帝を弑して、皇子重茂を立てたり。是に於て睿宗の子隆基、兵を起して、韋后及び其黨與を誅し、重茂を廢して、睿宗を位に復せり。幾もなく、睿宗は位を太子隆基に禪れり、之を玄宗とす。

### 第五節 安史の亂

玄宗 玄宗即位の初め、精を勵まし、治を圖り、姚崇、宋璟等の諸賢相尋ぎて政に任じ、國富み政平なりき。故に後世治を言ふもの、貞觀、開元と並稱し、唐の賢相を稱するものは、前に房杜を挙げ、後に姚崇を推す。開元は、當時の年號なり。然れども、其後帝漸く政に倦み、奸相李林甫事を用ひ、貴妃楊太真寵を專にして、紀綱大に弛み、遂に一大禍亂を醸生せり。

姚崇宋璟  
開元の治  
李林甫  
楊太真

此時(元)正天(阿)仲麻呂吉備真備僧  
立防入唐  
大燕皇帝

顏泉卿等の敗死

玄宗蜀に走る

郭子儀李光弼  
回紇の來援

安祿山 安祿山はもと胡族なり、性桀黠にして巧に楊貴妃に結びて、帝の信任を得、累進して平盧(直隸)范陽(上)河東(山西)の節度使を兼ねしが、遂に反旗を翻へし、胡兵十五萬を率ひ、南侵して洛陽を陥れ、大燕皇帝と僭號したり。昇平日久しく、天下戰を忘れたる時、遽に此大亂にあひ、朝野狼狽して爲す所を知らず、顏真卿、顏泉卿、張巡等の義士、前後相繼いで起りしが、或は敗死し、賊勢益猖獗にして、長安遂に陥り、帝蜀に出奔して、肅宗位を嗣げり。肅宗は、使を回紇に送りて、援を求めたり。既にして祿山は、其子慶緒に弑せられ、慶緒は其將史思明に弑せられ、思明亦其子朝義に弑せられて、内訌打續きしに、官軍にては郭子儀、李光弼善く戦ひ、回紇の援兵亦至りしかば、賊勢是れより挫けて、官軍長安を恢復せり。かくて代宗の世に至り、賊將李懷仙



亂平ぐ  
は、其主史朝義を斬りて、出で降り、三世八年に亘れる兵亂、始めて平ぎぬ。

### 第六節 回紇吐蕃渤海大食諸國

**回紇** 安史の亂に功ありし回紇は、其初め鐵勒の一部族として、突厥に隸し、既にして唐に服事し、爾來漸く強大となれり。開元の頃、其酋長骨力裴邏、連に諸部落を併せて、悉く突厥の故地を領し、玄宗より封冊を受けて、懷仁可汗と稱したり。彼肅宗が援を求めたる時は、即ち回紇の最盛時に在りて、亂平ぎて後、唐の回紇を待すること極めて厚く、年々絹帛を贈り、又時に皇女を可汗に娶せり。然るに可汗相傳ふること十二世の後、黠戛斯族の爲に破られ、餘衆漠西に奔れり。回紇は又回鶻といへり。

骨力裴邏  
回紇の全盛

吐蕃の入寇

陽成天皇の時、渤海より裴頤、來り菅原道真と唱和せしことありき

大祚榮

**吐蕃** 吐蕃(吐羌と)は、古來支那と交通せざりしか、太宗の時互に兵を交へ、尋いで和を講じたり。然るに其後次第に勢を得て、殆ど西藏の全部を有するに至り、代宗の世には、其入寇甚しく、一たび長安を陥れて、代宗を奔らしめしことすらあり、爾來唐の代を終るまで、其入寇頻りなりき。  
**渤海** 當時遼東に於ては、渤海といふ一強國、新に起れり。其先は、靺鞨の一部落にして、松花江邊に住せしが、高句麗滅亡の頃、酋大祚榮といふ者出づるに及び、大に疆土を擴め、自ら震國王と稱し、遂に睿宗より渤海郡王の封爵を受くるに至り、孫欽茂の時には、肅宗より國王の位に進められたり。かくて渤海は、勢力益盛にして、今の盛京、吉林、咸鏡、平安地方を領有し、屢使聘を日本に通じ、二百餘年間海東の最強國たりき。



「モハメ  
ツド」

支那と亞  
刺比亞と  
の交通

大食國 之よりさき東西兩洋の間に、一大勢力の起るあり、  
之を回教國、即ち大食國(大食とは阿刺比亞人をいふ)となす。初め隋の頃モ  
ハメツド「モハメツド」といふ者、阿刺比亞に起りて、回教と稱する。新宗教  
を唱へ、阿刺比亞全土を一統したり。其後代々の教皇、よくモ  
ハメツドの遺志を継ぎ、經と劍とを以て、諸國を征服し、版圖  
忽ち擴大して、西は亞弗利加北岸を包みて、遠く西班牙に及  
び、東は中央亞細亞を掩有して、印度に至り、波斯の國土も大  
食の領内に没入せり。又支那と亞刺比亞との交通も、唐の貞  
觀年中より始まり、亞刺比亞の商船、常に廣東地方に來りき。

### 第七節 唐の衰滅

藩鎮の跋扈 玄宗の時、邊境に十節度使を置き、安史の亂後  
には、内地にも亦節度使を置きたり。此等は兵政の二權を握

藩鎮の患  
憲宗の英  
斷

り、數州を兼統し、其驕慢次第に增長せしかば、唐廷兵亂を厭  
ひて、姑息の方針を執りしが爲に、地方は殆ど諸侯割據の有  
様となれり。既にして禍亂遂に破裂して、諸鎮王命に抗する  
もの漸く多かりしかば、憲宗の時、英邁果斷の資を以て、痛く  
藩鎮の權を抑へ、劉闢、李錡、吳元濟等の叛亂を平定したり。然  
れども帝晩年に至り、政に怠りしより、宦官專權の端を啓き、  
一難去りて、一難又生ずることとなりぬ。

宦官の跋  
扈

宦官の專横、朋黨の争 宦官は、玄宗の時より、漸く朝政に與  
り、德宗、憲宗の際、其勢力益盛にして、爾來穆宗、敬宗、文宗、武宗、  
宣宗、懿宗、僖宗、昭宗の八帝、唯虚器を擁するに止まりて、帝位  
廢立の權、一に宦官に歸したり。加之當時朋黨の争起りて、益  
國政を攪亂したり。  
朋黨の争は、穆宗の時に始まり、一方には李德裕あり、一方に



牛李の黨

は牛僧儒、李宗閔あり、各其黨を率ゐて、相排擠し、互に政權を争ひしが、宣宗の世に兩黨の首領死歿して、黨争こゝに已みたり。雖も、宦官の専恣は、遂に奈何ともすること能はざりき。

朱全忠

この際菅原道真字多天皇に奏して遣唐使を廢したり唐亡ぶ

懿宗、僖宗の世となりては、紀綱全く弛みて、王室の威命行はず、群雄諸處に起りて、天下亂れたり。昭宗の時に當り、朱全忠といふものあり、竊に異圖を懷き、先づ宦官を誅滅し、尋いで帝を弑して、哀帝を立て、遂に帝に迫りて、位を讓らしめ、國を梁と號し、汴(洛陽)に都せり。之を梁の太祖となす。(皇紀一五六七年)

### 第八節 當代支那の學藝宗教

#### 一 儒學

隋の時、劉焯、劉炫、王通等、儒學を以て名あり。唐の太宗に至り、從來學派の多岐にして、經義の區々なるを憂ひ、當

孔穎達 顏師古

漢唐の儒學

時の名儒、孔穎達、顏師古等に詔し、諸説を参照折衷して、五經正義を撰ばしめたり。安史の亂後、斯學衰へ、儒者として名あるもの、獨り韓愈あるのみ。要するに漢魏以來、唐を通じて、儒學は一般に守舊の風となり、只章句字義の末に拘はるのみなりき。

#### 二 文藝

唐初は、詩文共に尙六朝浮華の弊を脱せざりしが、中葉以後、大家輩出して、文運全く一變せり。散文の大家として、當代に傑出せしは、韓愈、柳宗元の二人にして、能く時流の駢儷文を排して、秦漢達意の古文に復せしは、實に此二人の力なり。詩の大家には、杜甫、李白、白居易、孟浩然、杜牧等あり。韓愈は、又詩に長じ、李杜韓白と並稱せらる。詩文の外、書には、顏真卿、張旭あり。畫には、吳道玄、王維(南宗派)、李思訓(北宗派)あり、皆稀世の大家たり。

韓愈 柳宗元

杜甫 李白 等

書畫の大家



僧玄奘

僧義淨

桓武天皇の時僧最澄及び空海入唐せり法運の頓挫

十三宗

三、佛教 南北朝以來隋唐に至り、法運益興り、名僧知識輩出せるが中に、最も著名なるは、玄奘なり。玄奘は、貞觀三年を以て、渡天の途に上り、流砂を渡り、葱嶺を踰え、五天竺を跋渉する。こと十七年、經論六百餘部を齎し歸り、大に唐帝の尊信を得て、専ら翻譯に従事し、七十四部千三百餘卷を譯出せり。從來の譯書に對して、之を新譯と稱す。後高宗の時、僧義淨も亦印度に遊ぶ。こと多年、幾多の經典を求め歸れり。かくて文宗の時には、寺數四萬を踰え、僧尼の數七十萬に上れり。然るに武宗に至り、厚く道教を信じて、大に佛徒を虐げしかば、法運爲に頓挫したり。

支那に於ける佛教の大勢は、東漢より晉末まで、凡そ三百年間は、漸盛の時期にして、東晉より唐末まで、凡そ五百年間は、其最盛時期といふべし。彼三論、成實、涅槃、地論、攝論、俱舍、天台、律、淨土、法相、華嚴、眞言の十三宗は、皆此五

三武の厄

百年間に出でしものにして、日本に入宗の傳はりしも、亦唐の代なり。然れども此最盛時期に於て、稀に佛徒を虐げたる帝王なきにあらず。就中元魏の太武、後周の武帝、唐の武宗、其最たり。佛徒之を三武の厄と稱す。

四、道教 戰國時代の末より、老莊の説に附會したる一種の

宗教起れり。之を道教といひ、其徒を方士といふ。方士の徒は、神仙不死の術を説き、或は羽化登天の方を講じて、巧に人心を勧誘したりければ、秦皇、漢武の如き雄武の君は、往々にして其心を動かしたり。爾來魏晉南北朝の間、佛教と並び行はれしが、唐に至りては、其姓の老子と同じきより、老子を以て帝室の遠祖と仰ぎ、歴代の天子厚く之を崇敬せり。道教是れより唐の國教となり、隆盛を極めたり。

五、其他諸教 佛道二教の外、當代に行はれたる宗教に、祇教、景教、摩尼教、回教の四あり。祇教は、波斯人「ゾロアスター」の創

道教と唐室

祇教



景教  
 波斯より北朝に傳はり、唐の時次第に世に行はれたり。景教は、本名を「キリストリアン」教といひ、基督教の一派なり。貞觀中東羅馬より波斯を経て、唐に傳はり、一時は盛に中國に流布したり。摩尼教は、景祇諸教を附會したるものにして、波斯より、唐に傳はりて、専ら西北胡人の間に行はれたり。回教は、唐と亞刺比亞人と交通の際、海陸兩路より支那に傳はれり。但し武宗の時、此等の諸宗教は佛敎と共に虐待を受けたり。

### 重要事蹟事蹟年表

推古	舒	明	天	皇	齊明	天智	天皇	持統	天武	元明	天皇	
一二六七	一二七八	一二八九	一二九〇	一二九二	一二九六	一三〇二	一三二二	一三二八	一三三一	一三五〇	一三六五	一三七二
煬帝	高祖	太宗	上同	上同	上同	高宗	上同	上同	中宗	上同	睿宗	
日本始めて支那と通ず	隋亡ぶ	僧玄奘印度に行く	東突厥亡ぶ	モハメッド死す	景教唐に入る	大食波斯を滅ぼす	百濟亡ぶ	高句麗亡ぶ	僧義淨印度に行く	武后篡立し國號を周と改む	武后の亂平ぐ	大祚榮渤海郡王となる

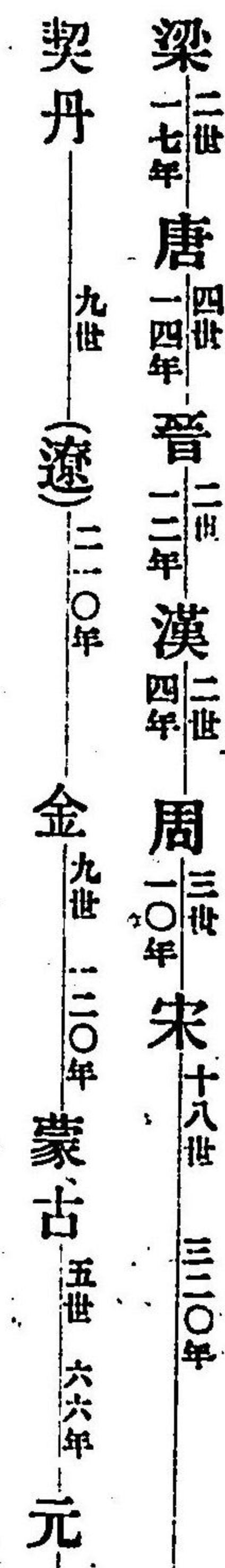


第四章 隋唐時代

天 皇	醍 醐	天 皇	仁 明	天 皇	嵯 峨	天 皇	淳 仁	天 皇	孝 謙
一 五 六 七	一 五 〇 五	一 四 七 八	一 四 二 三	一 四 一 五					
昭 宗	武 宗	憲 宗	代 宗	宣 宗					
朱全忠唐を篡ふ	佛教等の禁制起る	藩鎮の亂平ぐ	安史の亂平ぐ	安祿山叛す					
			吐蕃入寇す						

第五章 五代宋時代(皇紀一五六七年より一九四〇年まで)

此時代は、唐の滅亡より元朝まで、凡そ三百七十餘年の間に於て、我が醍醐天皇より、後宇多天皇までに當り、此間漢族漸く他の民族に壓せられしが、終に蒙古族大に興り、殆ど全亞細亞を混一して、元朝を立て、餘威遠く歐洲に及べり、左に諸族消長の氣勢を示す。



第一節 五代の沿革 契丹

唐滅後五十餘年の間、梁、唐、晉、漢、周、相尋ぎて中國に興亡せり、之を五代と稱す。但し五代の領有せし地は、僅に江北の一部に止まり、能く統一の業を成し、ものあらず、畢竟群雄割據の亂世のみ、而して此間唐の洛陽に都せし外は、皆汴に都せり、又五代は、之より先に同國號あるにより、區別の爲に、後梁、後唐、後晉、後漢、後周と稱す。



梁 梁の太祖朱全忠既に唐に代りて、位に即きしかど、諸鎮服せざるもの多く、晉王李克用(山西)岐王李茂貞(陝西)吳王楊行密(江淮)蜀王王建(四川)等最も大なり。而して晉王李克用死して、子存勗(晋)嗣くに及び、善く兵を用ゐて、屢梁を破り、太祖の次なる末帝の時には、晉の勢益熾なり、存勗は國號を唐と改め、自ら帝位に上れり、之を唐の莊宗とす。幾もなく、汴陥りて、梁亡びぬ。

李克用  
李存勗  
梁亡ぶ

明宗の治  
石敬瑭  
唐亡ぶ

唐 唐の莊宗の梁を滅ぼすや、蜀岐諸王亦降附し來れり。是れより帝心漸く驕りて、將士を疎んじければ、將士怨みて亂を作し、李嗣源(克用の子)を擁立せり、之を明宗とす。明宗の在位八年間は、五代中に在りて、小康の世とす。然るに子閔帝に至り、李從珂(明宗の養子)帝を逐ひて篡立し、石敬瑭(明宗の女婿)更に契丹の兵を假り來りて、從珂を攻め殺し、國號を晉と改めたり。

之を晉の高祖とす。

晉 晉の高祖は、契丹の力によりて、唐を滅ぼしたれば、即位の後、東北十六州(直隸省)を割讓し、且年々帛三十萬匹を輸して、契丹に臣事したり。出帝次いで立つに及び、禮を契丹に失ひしかば、契丹大舉して、汴を陥れ、帝捕へられて、晉亡びぬ。

晉亡ぶ  
耶律阿保機

契丹 契丹は、鮮卑の一種なり。唐末に至り、其部酋に耶律阿保機(保機)といふものあり、頻に兵を用ゐて、諸部を併呑し、五代梁の時を以て、帝と稱せり、之を契丹の太祖とす。太祖智勇にして、大に境を拓き、東は渤海國を降し、西は遠く漠西地方を征服せり。晉を助け又之を滅ぼしたりしは、太祖の子太宗なりき。

契丹の強

契丹國號を遼と稱す

太宗既に晉を滅ぼし、國號を遼と稱して、汴に留まること三月なりしかど、民心の服せざるを嘆じて、遂に北歸せり。



劉知遠

に於て晉將劉知遠といふもの、自ら帝と稱し、汴に都して、國を漢と號せり、之を漢の高祖とす。

郭威

漢 幾もなく漢の高祖死し、子隱帝立つ。帝宿將郭威の功を忌みて、之を除かんごせしかば、威は自ら闕に訴ふご稱し、兵を擁して汴に向へり。隱帝之を拒ぎて、亂兵の爲に弑せられ、威は衆望を容れて、帝位を踐めり、之を周の太祖とす。

漢亡ぶ

周 時に隱帝の叔父劉崇、周に従はず、晉陽(山西)に據りて、北漢帝と號し、其他南唐(安徽)南漢(廣東)後蜀(四川)等、各一方に割

周世宗の英明

據せり。太祖に繼ぎて立てる世宗は、英邁の君にして、内庶政を整へ、外精銳を用ゐて、後蜀を破り、南唐を降し、又遼を伐ち

趙匡胤

て瓦橋關(北京の西南)南の地を奪ひしかば、病を獲て早く死せり。子恭帝幼弱なりしかば、人心漸く功將趙匡胤に歸し、匡胤遂に周の禪を受けたり、宋の太祖即ち是れなり。

周亡ぶ

五代の際、世道人心痛く頽廢して、節義廉耻の風全く亡びぬ。馮道といふものあり、唐晉遼漢周の五朝に歷事し、君を代ふること十一帝、弱を捨て、強に媚び、敗を去り、勝に就き、巧に亂世の間に處して、常に將相の榮職を離れたることなし、而して當時はかくも無節操なる馮道を、寛厚の長者として、推重せり、亦以て當時の士風を察知すべし。

第二節 宋の初世 安南 高麗 西夏

太祖

太祖及び太宗 宋の太祖即位の後、力を東南に專にして、南唐、後蜀、南漢諸國を平げしが、北方は遼、北漢、相結びて、勢方に熾なりければ、全く北征の念を斷ちて、心を内治に傾け、先づ唐以來の患たる藩鎮の跋扈を制せんご欲し、宰相趙普ご謀り、節度使の死去致仕ある毎に、文臣を以て之に代へ、漸く兵馬財政の權を收めしかば、藩鎮專横の禍全く絶ゆるに至れ

藩鎮の禍絶ゆ



太宗  
宋遼の衝  
突

り。然るに次帝太宗、北漢を征して之を滅ぼし、更に進みて遼を侵し、より、宋遼の平和に破れて、北邊常に遼の來寇を免れざりき。但し太祖太宗は、共に寛仁の君にして、子弟舊臣諸降將に至るまで、皆其終をよくするを得、寛厚忠實は、實に宋一代の氣風となれり。然れども文弱の弊是より生じて、政策常に儉安に流れ、復た外寇を奈何ともする能はざりき。  
安南 交趾地方は、前漢以來支那の版圖たりしが、五代の時丁部領といふ者出て、國亂を平げ、瞿越國を建つ。宋の太祖特に部領を交趾郡王に封ぜり。是れより交趾は、外藩となるに至りぬ。後南宋の時、交趾郡王の封爵を進めて、安南國王と爲せり。

宋代の氣風

丁部領

安南國王

新羅亂る

高麗 嘗て唐と結びて、百濟、高句麗を滅ぼし、漸く半島の過半を一統したる新羅は、唐末に至り、政令大に亂れて、叛賊踵

高麗の一統

高麗と遼

ぎ起り、弓裔は江原道に據りて、國を泰封と號し、甄萱は全羅道に自立して、後百濟と號せり。然るに弓裔の臣に、王建といふものあり。陰に人心を收攬して、遂に其主を逐ひ、自ら王位に上りて、國を高麗と號し、尋いで新羅王の降を納れ、(皇紀五年)翌年後百濟を滅ぼし、全半島を一統して、松嶽(京城府)に都せり、之を高麗の太祖となす。  
高麗と遼との關係 當時支那は、五代晉の世なり。太祖は使聘を晉に通じて、其正朔を奉じ、爾後歷世、漢周宋に事へて、其制を受けしが、遼の盛なるに及び、遂に宋と絶ちて、遼の封冊を受けたり。第七代穆宗に至り、大臣康兆、王を弑して、恣に顯宗を立てければ、遼の聖宗、其不臣を怒り、親征して、兆を誅し、國都を陥れたり。顯宗南奔して、罪を謝し、貢を納れて、赦さるゝを得たり。



真宗

寇準

澶淵の盟

真宗の世 太宗死して、真宗立つに及び、遼の聖宗大舉して、來侵せり。宋の君臣驚懼し、都を遷して、敵鋒を避けんと議するもの多かりしに、宰相寇準、衆議を排して、親征の策を定め、王師進みて、澶淵（直隸省）に至れり。かくて兩國こゝに訂盟し、宋は毎歲銀帛を遼に贈ることとし、且互に兄弟の國たることを約して、事平ぎたり。

寇準相たりし時、丁謂といふもの、才氣あるを愛し、擢んで、參政とせり。謂の準に事ふること甚恭し、一日準、謂會食せし時、羹汁準の鬚を汚し、に謂直に立ちて之を拂ひしかば、準笑つて、參政は一國の重臣なるに、官長の爲に鬚を拂ふは、似合はしからずといひしかば、謂大に恥ぢて、永く之を衒み、後準を譖して、之を黜けたり。

仁宗  
西夏の建

仁宗の世 夏州（甘肅省）の節度使は、五代の頃より、叛服常なかりしが、真宗死して仁宗立つに及び、趙元昊（カ）といふもの、其地

宋と遼夏

人材の輩出

に據りて叛し、大夏皇帝と僭號せり。時に遼亦兵を集めて、南下の勢を示し、邊境愈多事なりしかば、宋は遼に對する歲幣を増し、夏にも亦銀帛を與ふることを約したり。又當時朝廷には、朋黨の軋轢を生じて、内治亦多少の紛擾を免かれざりしかど、韓琦、范仲淹、富弼、歐陽修等の名士輩出して、人材の盛なること亦古今罕に見る所なりき。

### 第三節 新法の争

神宗

神宗、王安石 仁宗より英宗を経て、神宗立つ。神宗は四夷を拂ひ、國威を張らんと欲し、王安石の才學あるを信じ、遂に政事を委任したり。

王安石の  
新法

王安石はこゝに於て大改革を斷行したり、世之を新法といふ。新法には、青苗法、均輸法、募役法、市易法、方田均稅法、保甲法、



保馬法等種々ありて其法必ずしも悉く非難すべきに非ざりしかば、施行の急に失せしむ官吏其人を得ざりしこの爲に、弊害百出して、不平の聲四もに起り、富弼、范純仁、司馬光、呂公著、蘇軾、蘇轍、程顥等の諸名士、頻に新法を駁せしかば、安石は頑乎として顧みず、悉く反對者を排斥して、益其實施に勉めたり。

**元祐の更革** 然れども安石の施政は、内外共に輿論の反對を受けて、神宗當初の希圖は、總て水泡に歸し去りぬ。帝死して、次帝哲宗尙は幼なり、太皇太后高氏政を攝し、司馬光を相として、悉く新法を廢したり。年號によりて、之を元祐の更革といふ。天下皆新政を歡呼し、高氏を欽慕して、女中の堯舜と稱し合へり。

司馬光徳宗一世に高く、其歿するや四方より會葬するもの、皆其親戚を哭

司馬光  
元祐の新  
政

するが如くなりきといふ。光嘗て人に語りて曰く、吾れ人に過ぎたることなし、たゞ平生公言し難き所行とては、一も之なきのみと。又有名なる資治通鑑は、光が勅命を奉じ、十九年を費して、修めたるものなり。

**新法黨と元祐黨** 幾もなく光死して、其黨の諸士、洛、蜀、朔の三派に分れて、相軋りしに、高太后死して、哲宗の親政となるに及び、安石の徒なる章惇、蔡京等、志を得て、新法を復し、三黨の士皆貶黜せられたり。徽宗の世に至り、向太后政を攝して、再び新法を廢し、惇、京等を罷めしが、後徽宗の親政となるや、蔡京等又用ゐられて、元祐の諸士悉く退けられたり。京相たること前後二十年に及び、子弟族類朝に満ちて、威權内外を傾け、佞臣童貫、之と相表裏して、國政を紊亂し、且帝に勸むるに奢侈土木を以てして、心を政治に用ゐるしめざりき。

洛蜀朔の  
三派  
章惇蔡京

童貫







國に來れ  
道教の盛  
衰

最も其興隆を圖りしかば、道教益勢力を得たり。然れども徽宗以後は、國運と共に衰微するに至りぬ。

### 第五節 金遼の興亡 宋金の和戰

金の建國

女眞の勃興 女眞は、靺鞨の一部族にして、渤海國の亡びし以來、永く契丹の支配を受け居たりしが、部酋阿骨打といふもの出づるに及び、遼に背きて自立し、國を大金と號せり。之を金の太祖とす。當時遼は、天祚帝と稱する暗君位に在り、國勢全く衰微せり。宋の徽宗、童貫の計を用ゐて、好を金に修め、遼を夾撃せんとの意を通じ、相約して曰く、金は中京(内蒙の東部に在り)を取り、宋は南京(今の順天府)を取り、事成らば、宋は南京附近の十七州を收め、歲幣を金に贈ること、遼の時の如くせんこと。是に於て金先づ大舉して、中京を陥れ、天祚帝を走らせしに、

宋遼金の  
關係

宋は反りて遼軍の爲に破られて、進むこと能はず。金乃ち宋を責むるに、出兵の期を失へるを以てし、進みて南京を陥れ、前約を變じて、僅に六州を宋に與へたり。

遼の滅亡

既にして金の太祖死して、太宗立つに及び、西夏の降を納れ、又天祚帝を窮追して、之を虜とし、全く遼を滅ぼせり。然れども其一族耶律大石といふもの、殘兵を率ゐて、遠く西に奔り、西遼と稱する國を建立するに至れり。

李綱

金の南侵 遼の亡ぶるや、金は口實を設けて、宋を侵し、汴京を圍めり。時に欽宗位に在り、宋將李綱固く主戰論を唱へしに、宰相李邦彥之を排して、和を金に請ひ、偏に金の要求に従ひて、金銀を出し、土地を割き、且親王宰相を質として、一時の安を偷みぬ。

汴京陥る  
張邦昌

既にして金又口實を設けて、來侵し、遂に汴を陥れ、張邦昌を



立て、楚帝となし、徽宗、欽宗を捕へて、北に還れり、年號によりて之を靖康の難といふ。邦昌は、宋の相にして、曩に金に質たりし人なり、幾もなく位を避けて、別に宋の皇族を立てたり、之を高宗となす。

**南宋高宗** 高宗即位の初め、李綱を相として、主戦の方針を執り、紀綱將に張らんこそせしが、黃潛善用あるに及び、朝議一變して、講和論勝を制し、驍將宗澤憤死して、王師解體し、漸く金軍の爲に追はれて、遂に臨安(浙江省)に都することなれり、世に之を宋室の南渡と稱し、高宗以後を南宋といふ。臨安奠都の後、方針再變して、韓世忠、張浚等の主戦論者、登庸せられ、殊に忠勇を以て名高き將軍岳飛あり、屢金軍を破りて、宋の士氣頗る振へり、時に金の太宗死して、熙宗立ち、稍和を欲するの意あり、宋の降人秦檜、窃に其意を承けて、宋に歸

宋室の南渡  
岳飛

秦檜

宋金の和

り、巧に高宗に媚びて、政柄を握り、遂に獄を起して、大に主戦論者を貶竄し、地を割き、幣を約して、和議成れり。

宋の孝宗  
金の世宗

**講和後の金宋** この後金の熙宗は、驕恣政を怠りて、其族亮の爲に弑せられ、亮亦其下の爲に弑せられて、世宗位を嗣げり、時に宋の高宗亦位を其子孝宗に禪れり、孝宗英邁にして、銳意恢復を圖りしかば、世宗も亦小堯舜と稱せられたるほどの賢君なりければ、南北對峙して、彼此相乗ずべきの隙なく、生民爲に休息するを得て、天下無事なりき。

金宋共に衰ふ  
韓侂胄

然るに金にては、世宗死して章宗立つに及び、政令大に亂れ、蒙古北に叛きて、國運漸く傾きたり、此間宋は、孝宗より光宗を経て、寧宗の世となり、韓侂胄權を專にして、多く名士を黜け、又金の衰ふるに乗じて、北伐せしが、戰破れて、反りて金軍の侵入を招けり、寧宗乃ち侂胄を殺し、其首を送りて、金に謝



し、且歳幣を増して、事なきを得たり。

### 第六節 蒙古の勃興 西域の形勢

太祖の連勝

成吉思汗

蒙古の鐵木眞 蒙古は、元と室韋の一部落にして、斡難、克魯倫、兩河の間に遊牧し、代々遼金に隸せしが、酋長也速該に至り、勢始めて強し、然るに子鐵木眞、その後を襲ぐに及び、諸部多く叛き去りしかば、英邁非凡の鐵木眞は、毫も屈する色なく、殆ど三十年間にして、韃靼諸部を席卷し、大に諸族を斡難河源に會して、自ら蒙古大汗の位に上り、成吉思汗と號せり。之を太祖とす。此時宋は寧宗、金は章宗の世に當れり。(皇紀六六年土御門天皇の世)かくて太祖は、乃蠻の酋長太陽汗を伐ちて、之を殺し、其子屈出律逃れ去りしを、也里石河(オビ河の上流)の畔まで追撃し、轉じ

西遼の徳宗

回教國東西に分る

て西夏を伐ちて、其降を納れ、遂に大舉して、金を侵したり。此時金は、宣宗の世なりしが、大に懼れ、金帛を納れて、和を請へり。たましく、太祖將に西遼に事あらんことをせしかば、其請を許して師を班したり。

西遼の建國 初め遼の亡ぶるや、其族耶律大石、餘衆を率ゐて、西に走り、行くく、回鶻の諸部を降し、遂に國を、今の露領土耳其斯坦地方に建つ、之を西遼(又黒契丹)の徳宗とす。元來此地方は、土耳其諸族の地なるが、就中西隣なる塞爾受克國最大なりき。

回教國 塞爾受克國の由來を尋ねんには、更に古に遡りて、西域諸國の形勢を説かざるべからず。嘗て隋唐の際に勃興せし回教國は、其後東西に分れ、東方の教皇は、バグダッドに都し、勢を振ひしが、唐の末頃より、次第に衰へて、數多の邦國



「ガズニ」  
と印度

領内に分立するに至れり。就中「ガズニ」(阿富汗)最も強く、其王「マームード」の世(宋の頃)に至りては、中央亞細亞の大半を従へて、印度の北半に及べり。然れども「ガズニ」は、土耳其族にし、回教徒なりければ、印度侵略以來、宗教上の衝突絶えざりき。「マームード」死して、「ガズニ」王朝頓に衰へたり。

「マレク  
シヤ」

**塞爾受克** 「ガズニ」王朝の衰ふるに方り、突厥の裔なる塞爾受克族、次第に勢力を得、遂には「ヂヨオルヂア」を略し、「アルメニア」を取りて、東羅馬帝國の兵を破るに至り、「マレクシヤ」王たるに及びて、其勢益強く、西は「シリア」「パレスタイン」を略して、東羅馬に迫り、東は阿富汗斯坦を取りて、印度北部に及び、「イスバハン」に都したり。(宋の頃)彼の西洋史上に名高き十字軍は、歐洲諸國民が「ジェルサレム」(パレスタインの中に在り)を恢復せんが爲に、この塞爾受克族に對して、起せし戦

十字軍

争なり。

花刺子模  
起る

**西遼と塞爾受克花刺子模** かくて「マレクシヤ」の子、「サンヂヤル」の時、西遼と戦を開きしに、徳宗逆へ撃ちて、大に之を「アム」河に破り、悉く河東の地を平げ、尙ほ花刺子模(「アム」を從へたり。是より塞爾受克國漸く振はざるに至りぬ。西遼は、第三代天禧帝の時、國勢衰へ、回鶻東に叛き、花刺子模西に自立せり。彼の蒙古の太祖に追はれたる屈出律は、此時を以て西遼に來寓し、遂に國を篡へり。同時に其西隣なる花刺子模は、衰殘せる塞爾受克國を併せて、強大となれり。

西遼亡ぶ

**第七節 蒙古太祖の雄圖 南露の征伐**  
太祖の西征 さて蒙古の太祖は、暫く討金の師を中止し、其將哲別を遣し、西遼を攻め滅ばして、屈出律を殺し、直に花刺



花刺子模  
亡ぶ

蒙古軍歐  
洲に入る

子摸の境を歴して、修好を其主「モハメット」に求めたり。「モハメット」素より蒙古人を侮り、其使者を斬りしかば、太祖大に怒り、尤赤、察合台、窩濶台、拖雷の四皇子、以下諸將を率ゐて親征し、大に「モハメット」の軍を破りて、其都城撒馬兒罕を陥れ、更に哲別、速不台二將に、各兵一万を授けて、之を窮追せしめたり。「モハメット」裏海の一島に遁れ、客死せり。其子札蘭丁乃ち餘衆を集めて、恢復を圖りしが、太祖諸皇子を部署して、諸處に會戦し、遂に札蘭丁を印度河外に驅逐せり。此間哲別、速不台は、長驅して、裏海の南を廻り、行く／＼沿道諸國を降し、大に南露諸侯の聯合軍と、アツフ海北に戦ひて、之を撃破したる後、軍を班して、本軍に會せり。

**太祖死す** 太祖の中央亞細亞より凱旋するや、尋いで西夏を攻めて、之を滅ぼし、(其祖趙元昊より十世百九十年)更に進みて金を侵さ

六盤山

んこせしに、病を獲て、六盤山(甘肅省の西邊)に死せり。

**太祖死後の形勢** 太祖終に臨み、其領土を諸子に分てり。長子尤赤は、先だちて死しければ、其子拔都に今の西比利亞の西部を與へ、次子察合台に、西遼の故地を與へ、第三子窩濶台は、特に帝位を踐みて、乃蠻地方を領せり、之を太宗となす。而して第四子拖雷は、蒙古の舊土を得て、太宗を輔佐したり。

### 第八節 金の滅亡 蒙古の西征

**金の滅亡** 蒙古の太宗即位の後、父帝の志を繼ぎ、皇弟拖雷、皇甥蒙哥(拖雷の子)等を従へ、金を伐つ時に金は、宣宗既に死して、哀宗の世なりしが、金軍連敗して、汴京陥り、哀宗、蔡州(河南)に出奔せり。太宗乃ち宋と約して、蔡州を夾撃せしかば、哀宗自到して、金遂に亡びぬ。

金亡ぶ



耶律楚材

蒙古の太祖太宗の謀臣に、耶律楚材といふものあり、遼の人なり、學徳世に優れ、蒙古に事へて、功勞殊に多かりき、常に曰く、一利を興すは、一害を除くに如かず、一事を生ずるは、一事を滅するに如かずと、平生妄に言笑せず、人に接する時は、温恭の容、外に溢れたりといふ。

蒙古と宋 當時宋にては、寧宗既に死して、理宗位に在り、蒙古と約して、金を滅ぼしたる後、更に兵を出して、蒙古領なる汴京、洛陽を取りしかば、平和こゝに破れたり、然れども蒙古は、正に歐洲侵略に急なりしかば、未だ力を宋の征服に用ふる暇あらざりき。

高麗蒙古に降る

蒙古と高麗 遼亡びて金興るに及び、高麗は、金に臣事すること、遂に於けるが如くなりき、蒙古太宗の時は、高麗にては高宗位に在り、太宗將を遣し、國都を攻めしかば、高宗上表して、臣と稱し、貢を納れ、世子を質として、難を免れたり。

蒙古軍の西征

蒙古西征の師 高麗の征伐と同時に、太宗は皇甥拔都、蒙哥皇子貴由、皇孫海都等を將とし、大に兵を發して、西征の途に上らしめたり、諸將破竹の勢を以て、直に歐洲に撃ち入り、露國の都府「リアザン」「モスカウ」等を屠り、更に南下して、「キエフ」府を陥れ、露國略平定したり、是に於て貴由、蒙哥は歸國せしが、拔都、海都、二將は、更に路を南北に分ちて、進撃し、北軍の海都は、波蘭に入り、「クラカウ」府を取りて、「シレシヤ」に進み、日耳曼、波蘭の聯合軍「リীগニツ」に近傍に激戦して、大に之を破れり、此間拔都は、南軍に將として、匈牙利を攻め、其王「ベラ」四世の大軍を破りて、國都「ペスト」を陥れたり、時に太宗の計音、本國より至りしかば、諸將急に師を班せり、但し拔都は、留りて南露を鎮し、欽察又は金黨と稱する有力なる國を建て、西は「カルパシヤ」山より、東は也里的石河までを領したり。

拔都海都の遠征

欽察國



憲宗

憲宗 蒙古の本國にては、太宗死後、定宗(皇子)立ち、定宗の後には、憲宗(子蒙哥)位を嗣げり。此際儲貳の事につき、内訌絶えずして、力を外に伸すこと能はざりしが、憲宗位に即くに及び、皇弟忽必烈之を輔佐して、盛に外征の師を出すことなれり。

旭烈兀の西征

憲宗先づ忽必烈をして、南征(宋、大理、吐蕃)せしめ、後親ら兵を率ゐて、之に繼ぎ、同時に皇弟旭烈兀(忽必烈)をして、西征せしめたり。旭烈兀は、波斯地方の回教徒を破り、進みて、バグダッドを屠り、教皇を擒にせり。回教國こゝに亡びぬ。旭烈兀は、別に將を遣して、印度北部を征服せしめ、自ら進みて、シリア、亞刺比亞を進撃せしが、憲宗の訃音に接して、軍を班し、征服地を統一して、此に君臨せり。之を伊蘭汗國と稱したり。

回教國亡ぶ

伊蘭汗國

第九節 宋の滅亡 南宋の文學

元の世祖

蒙古の南侵 憲宗の宋を攻むるや、路を蜀に取り、諸將を部署して、攻撃頗る烈しかりしが、たまく病に罹りて、陣中に死せり。時に忽必烈は、鄂州(湖北)攻圍中なりしが、帝の訃に接し、歸國して、帝位に上り、都を大都(北京)に奠めて、國號を大元と稱したり。之を世祖となす。

賈似道

宋朝の弊政 既に述べたる如く、蒙古は太宗以後、内訌及び西征の爲に、力を宋に用ゐる暇なく、宋は之が爲に一時少康を得たりしかば、理宗稍政に怠り、奸相賈似道威を弄して、上下を壅塞せり。蒙古の憲宗の來侵は、即ち此時なりしが、憲宗死して、蒙古軍退去するに及び、似道の專横益甚しく、理宗死して、度宗の世となりては、正人去りて、群小朝廷に滿ち、志士憤惋して、欺を蒙古に通ずるもの多かりき。



文天祥  
張世傑  
伯顔

臨安陷る

崖山の戦

宋朝の末路 元の世祖、此時に乗じて、大舉し來り、襄陽(湖北省)を降し、將に進みて臨安を衝かん。す時に度宗死して、恭帝立ち、似道を貶して大に勤王の師を募りしかば、文天祥、張世傑等の諸將奮つて王城を守衛せり。然るに元將伯顔來りて、臨安を圍むに及び、非戰論また勝を制し、恭帝遂に出で、元軍に降り、然れども諸王群臣、尙宋室を思ふもの多く、皆逃れて海に航し、陸秀夫、張世傑等相議して、端宗を福州に迎へ立て、天祥と内外力を戮せて、苦戦す。雖も衆寡敵せず、端宗は海路諸方に遁るゝの間に死したり。秀夫等乃ち皇弟昷を擁立して、崖山(廣東河の島)に據りしが、元兵の勢益鋭く、天祥は陸戦に敗れ、虜となりて死し、秀夫は帝を負ひて入水し、遺族群臣殉死するもの甚多かりき。獨り世傑は、別に趙氏を求め、立て、宋祀を存せんと欲し、安南に赴きしに、海上颶風にあひ

宋の滅亡

朱熹

宋の四大儒

陸九淵

詩文の大家

正氣歌

て、溺歿し、宋室遂に全く亡びぬ。(皇紀一九三九)  
南宋の文學 宋代の文學は、前既に之を述べたるが、今其南渡以後の學術に就き、小しく補説せんに、先づ儒學史上に一大進歩を畫したる理學は、南宋の鴻儒朱熹を得て、始めて大成したり。世に濂、洛、關、閩の四大儒といふは、濂溪の周惇頤、洛陽の二程、關中の張載、閩中の朱熹をいふなり。朱熹と同時に一大儒あり、陸九淵といふ。熹と其見を異にし、熹が窮理を先とするに反して、誠心を本とせり。學者其門に輻湊して、一代の儒宗と仰がれ、其學徳の高きこと熹と相對峙せり。  
南宋詩文の大家は、呂祖謙、朱熹(以上)、范成大、陸游(以上)を最とす。文天祥、謝枋得は、宋末の忠臣にして、共に文辭を能くし、殊に天祥の正氣歌は、諸葛亮の出師表と同じく不朽の文字と稱せらる。



文天祥、零丁洋、支那の南海を過ぐるの詩の末句に曰く、人生自古誰無死、留取丹心照汗青と。こは人口に膾炙せるものなり。

重要事蹟年表

醍醐天皇	天長天皇	天保天皇	後一條天皇	後二條天皇	村上皇	天長天皇	朱雀天皇	醍醐天皇
一五七六	一五八三	一五八七	一五九六	一五九七	一六〇七	一六一一	一六二〇	一六三三
大後醍醐	後唐宗	明後宗	高祖晉	上同	高祖漢	太後祖周	太宋祖	上同
契丹の耶律阿保機帝と稱す	後梁亡ぶ	契丹渤海國を滅ぼす	後唐亡ぶ 高麗朝鮮を一統す	契丹國號を遽と改む	後晉亡ぶ	後漢亡ぶ	後周亡ぶ	安南の丁部領交趾郡王に封せらる
								「ガズニ」の「マームード」印度を略す
								澶淵の盟
								趙元昊大夏皇帝と僭號す
								王安石の新法



第五章 五代宋 代

天皇	皇	白河天皇	鳥羽天皇	崇徳天皇	徳天	皇	土御門天皇	順徳天皇	後堀河天皇	四條天皇
一七三二		一七四六	一七七五	一七八五	一七八六	一七八七	一八六〇	一八七八	一八八四	一八九四
上同	上同	睿宋宗	徽宋宗	上同	欽宋宗	高宋宗	寧宋宗	上同	上同	上同
塞耳受克の「マレクシャ」勢力強大となり都をイ スバハンに定む		元祐の更革	女眞の阿骨打國を金と號す	遼亡ぶ	耶律大石西遼國を建つ	宋室の南渡	花刺子模國興る	蒙古の鐵木眞成吉思汗と號す	西遼亡ぶ	花刺子模亡ぶ
								蒙古の軍大に南露諸侯の連合軍を破る	西夏亡ぶ 成吉思汗死す	金亡ぶ
										高麗蒙古に降る 「リーグニッツ」の戦

第五章 五代宋時代

後深草天皇	龜山天皇	後宇多天皇
一九一八	一九二九	一九三五
上同	度宋宗	上同
回教國亡ぶ	海都推されて蒙古の大汗と爲る	蒙古國號を建て、元といふ
		「マルコポロ」元に来る
		宋全く亡ぶ



## 第六章 元明時代(皇紀一九四〇年より二三〇四年まで)

此時代は、凡そ三百六十年の間にして、我が後宇多天皇より、後西院天皇（徳川四代將軍家綱の頃）までに當り、此間は、蒙古族の最盛期にして、東方亞細亞にては、漢族再び起りて主權を執りしかど、中央及び西南亞細亞にては、蒙古族長く勢力を振ひたりき、東方亞細亞に於ける革命、左の如し。

元 十世八八年  
明 二十世二九六年  
清

### 第一節 世祖 蒙古族の全盛 東西兩

#### 洋の交通 高麗

世祖、東南の經略 世祖の位に即くや、支那の舊制を參酌して、諸般の制度を定め、賢材を登用して、大に政治の改善を計れり。又蒙古は、元來自國の文字なかりしが、この時始めて蒙

世祖



後宇多天皇の弘安四年、範文虎等十萬を率ゐて、來寇せしむ。かど大敗して、生還せしもの僅に三人なりき。

南方の經路

古新字を製したり。之よりさき太宗の高麗を征服せし時、其國人太宗に勸むるに日本に通ずることを以てするものありしかど、未だ果さざりき。世祖に至り、高麗を介して、日本に數回の使を發し、尙ほ兵を出して威嚇せしかど、遂に志を得ざりしかば、是に於て大軍を發して、日本に寇せしに、事全く失敗に終れり。之より世祖は、轉じて南方の經路に従ひ、緬甸を撃ちて、之を降したり。安南は、曩に元に服せしかど、世祖が其南隣なる占城の服せざるを討ぜんが爲に、師を發するに及び、安南亦叛き去れり。然れども幾ならずして、安南占城皆降附せり。尋いで南洋諸島も、亦元の威に畏れて、入貢するに至り、瓜哇獨り従はざりしが、世祖兵を遣して之を攻め破りぬ。

安南にては、支那の文字を使用せり。元の頃には、陳時夏、段汝諧等の學士出

元及び諸汗國

で、一國の文運甚だ盛なりき。

蒙古族の全盛 今や蒙古族全盛の時期にして、内外蒙古、支那本部、朝鮮、後印度等を包括せる一大境土は、元室に隸し、窩濶台汗國は、阿爾泰山附近を有し、伊蘭汗國は、西南亞細亞を領し、察合台汗國は、中央亞細亞を占め、欽察汗國は、南露より「キルギス」曠野に亘れり。而して元朝は此等諸汗國の本宗として最高位を保ちたり。

東西の交通

東西兩洋の交通 蒙古の版圖、歐亞二大陸に跨りしより、東西兩洋の交通漸く開くるに至り、定宗、憲宗の頃には、「フランス」シスカン派の耶蘇教僧「カルピニ」(伊太利人)及び「ルブルキス」(フランス人)、「西歐より東亞に來り、次いで「マルコポロ」(伊太利人)及び「イブンバツターダ」(モロッコの人)は、支那に遠遊を試み、殊に「マルコポロ」は、元の世祖に事へて功勞多かりき。其紀行には、詳に當

「マルコポロ」  
「イブンバツターダ」



時の東洋の状體を描出せり。又世祖の末年には、モンテユルピノ(伊太利)のいふ者、羅馬法王の教書を齎して、元の朝廷に來り、其後、オドリツク(伊太利)「マリニヨリ」(全)等の耶蘇教僧、前後して支那に來れり。

當時歐洲にては、東亞を指して「カタイ」と呼べり。こは契丹が一時盛大なりしを以て、其國號よりかく轉訛せしものと知らる。

海都

海都 初め太祖は、第三子窩濶台を愛して、永く位を其子孫に傳へんと欲したりき。されば憲宗、世祖が、拖雷の統を以て、位に上りしは、太祖の本意に非ず。因りて諸王群臣陰に不平を抱くもの多く、世祖即位の後、別に太宗の孫海都を窩濶台汗國に擁立して、蒙古大汗と爲したり。是に於て蒙古大帝國二分し、伊蘭汗國は世祖に屬し、察合台汗國及び欽察汗國は海都に與して相争へり。

蒙古の分裂

元と高麗

元と高麗 高麗高宗の次には、元宗立つ。是れ即ち元の世祖の爲に、日本を招致せんむ務めたる王にして、元宗の次なる忠烈王は、世祖の爲に、兵を出して、日本に寇したる王なり。是より歴世、元に事ふるこゝ甚だ謹み、從ひて其干涉を受くるこゝ甚しく、王位の廢立一に元主の意に出で、萬般の國政悉く其左右する所となり、王妃は大抵元室の女にして、世子は多く其出に係るに至れり。

### 第二節 元の衰滅

成宗

成宗 元の世祖死して、皇太孫成宗立つ。即位の初め、海都尙屈せずして、抵抗せしが、幾もなく病歿して、其子察八兒來り降り、四十年來の内亂始めて鎮定せり。是より後の元史は、殆ど帝位争奪權臣跋扈の事跡のみ、こゝに其大要を述ぶべし。

内亂止む



鐵木迭兒  
拜住  
鐵失  
燕帖木兒  
伯顔  
元の積弊  
群雄  
朱元璋

權臣續出 武宗次いで立つ、此時丞相脫虎脫權を專にして、政を紊り、仁宗の世に、奸相鐵木迭兒出で、益國を誤りたり。英宗の時、鐵木迭兒死して、拜住丞相となり、紀綱將に張らんとせしに、逆臣鐵失、帝を弑し、拜住を殺して、泰定帝を立てたり。幾もなく、帝死して、天順帝立ちしが、燕帖木兒といふもの、帝を逐ひて、別に明宗を擁立せり。以後文宗、寧宗の二代に亘りて、燕帖木兒權を專にせしが、順帝の世に至り、燕帖木兒死して、丞相伯顔專横を極め、漸く異心を生ぜしかば、伯顔の義子脱々、窃に帝と謀りて、伯顔を斥けたり。かくて朝綱日に弛み、群雄蜂起して、元室遂に崩壊せり。

群雄起る 今其群雄の重なるものを舉げんに、韓山童は直隸に、郭子興は安徽に、張士誠は江蘇に、陳友諒は湖北に、劉福通は河南に割據せり。郭子興の部將朱元璋、獨立するに及び、

元亡ぶ

其勢俄に強く、陳友諒を攻め殺して、國號を吳と稱し、尋いで張士誠を擒にし、更に其將徐達、常遇春等をして、大舉して大都に迫らしめしかば、順帝支ふることを能はずして、上都(北京)に出奔せり。元璋乃ち位に應天府(今南京)に即き、國號を改めて、明と稱せり、之を明の太祖とす。

第三節 明の初世 安南征服 韃靼部

瓦剌部

太祖

太祖の施政 明の太祖即位の後、上都を攻めて、元の順帝を漠北に走らし、又群雄の服せざるものを討ちて、悉く之を平げ、中國全く統一せり。是れより太祖は、専ら意を内治に用ひ、法律を改め、胡俗を禁じ、學校を立て、禮樂を興し、又深く前代の得失に鑑み、政權を吏、戸、兵、刑、禮、工、六部の尙書に分ちて、以







三楊

漸く強くして、阿魯台を攻め破りければ、阿魯台窮して明に歸降せり。其後五刺の勢益強く、阿魯台亦叛して、こもく南侵し來りければ、成祖また北征して武威を輝し、遂に征途に死せり。この後五刺の酋長脱懼トクケといふもの、阿魯台を攻め殺し、元の宗室脱々トクタク不花フカを立て、勢を振ひたり。成祖より仁宗を経て、宣宗に至り、楊士奇、楊溥、楊榮、心を協せて、輔翼の任に當り、海内清平なりしが、次帝英宗の世に至り、三楊相尋ぎて歿し、宦者王振寵を專にして、朝政漸く亂れ、外患亦起れり。

第四節 明の内憂外患(一) 北虜 南倭

土木の變

英宗 英宗の時、五刺脱懼の子也先ヤクハ、大舉して明を侵せり。王振帝に勸めて、親征せしめ、也先土木(北京の西北)に戦ひしに、軍

英宗の復位

敗れて、英宗は虜となり、振は將士の爲に殺されたり。朝議乃ち景帝(英宗の弟)を立て、遂に英宗を尊びて、上皇とせり。既にして也先は、上皇を擁して、再舉し來りしかば、志を得ずして退去し、後遂に上皇を送還して、好を通ずるに至れり。

然るに景帝は、上皇の還幸を悦ばず、務めて其繼嗣を排して、位を己れの子孫に傳へんことをせしが、帝病むに及び、權臣石亨イケン、帝を廢して、上皇を復位せしめたり。其後石亨不軌を謀り、遂に獄中に死せり。

宦官王振等

宦官跋扈 さきに成祖靖難の兵を擧げしとき、宦官之に内通したりしかば、成祖厚く其功を賞し、大に之に信任したりしより、宦官漸く朝廷に勢力を振ひ、英宗の時には、王振威福を恣にし、次の憲宗より武宗の代に至るまで、數十年間、汪直、劉瑾等の宦官相繼いで政柄を握り、其弊害甚しきに至れり。



王守仁の武功

嚴嵩

かゝりしかば叛亂相踵ぎ就中寧王の叛最も重大なりしが、王守仁の力によりて之を平ぐることを得たり。武宗死して子なく、從弟世宗(孝宗の弟なる)立つ。世宗の世は、嚴嵩等の奸臣朝に當りて、盜賊諸處に起り、同時に北虜南倭の患頻なりき。

北虜の患

之よりさき瓦剌の也先は、其主脱々不花を弑して、可汗と自稱せしが、阿剌アラルといふもの、爲に攻め殺されぬ。然るに韃靼部に孛來ボライといふものあり、阿剌を殺し、脱々不花の子麻兒可兒を立て、小王子と號せり。瓦剌は爾後全く衰へしかど、韃靼の勢漸く盛にして、世宗の時には、韃靼の俺答アムダといふ者、連年明の北邊に寇したり。

南倭とは、日本海賊の來寇にして、元末の項より始まれり。當時日本は、南北朝争亂の際なりければ、西邊不逞の徒相結び

南倭の患

て、東亞の海上に出没し、高麗を初め、遼東、山東、以南兩廣の沿岸に至るまで、所々して奪掠の害を受けざるはなし。明の太祖、爲に防倭衛所を設けて、之を禦ぎしかど、來寇已まず。世宗の時に至りては、其害最も甚しかりき。

張居正

穆宗神宗 世宗死して、穆宗嗣ぎ、張居正相となりて、内治稍整ひ、俺答歸順して、北邊亦事なきを得たり。然るに次帝神宗立つに及び、居正死して、朝政又亂れ、内外再び多事となれり。殊に朝鮮の戦役、滿清の興起、東林の黨議は、神宗時代の三大厄難といふべし。次章に之を説かん。

### 第五節 明の内憂外患(二) 朝鮮の役

#### 滿清の興起

朝鮮の戦役 之よりさき高麗王は、代々元室に臣事して、怠



高麗亡び朝鮮興る

らざりしが、元斃れて、明起るに及び、高麗の功將李成桂といふもの、其主恭讓王を廢して自立し、明の太祖より封冊を受けて、朝鮮王と號せり。實に現今朝鮮王室の祖なり。爾來常に明に事へて、國交益親密を加へ、成桂より十五傳して、李昭(祖宣)に至る、恰も明の神宗と同時なり。

朝鮮の二大儒

朝鮮元と文字なし、上世より支那の文字を用ゐたりしが、李氏の世に及び、新字を造り、韓語を寫したり。當時申叔舟といふ學者、其事に當り、最も力を盡したり。李昭の世には、李栗谷といふ學者出づ。叔舟と並稱して、之を朝鮮の二大儒といふ。

日本朝鮮を伐つ

其頃日本にては、豊臣秀吉出でて、一國の大亂を平定し、更に明を征伐せんが爲に、道を朝鮮に假らんごせしに、李昭從はざりしかば、秀吉兵を發して、先づ朝鮮を伐ちたり。是に於て八道風を望みて瓦解し、國都忽ち陥りて、國王は義州に奔り、

明軍の敗

王子は虜となりぬ、之を壬辰の亂といふ。明の神宗乃ち祖承訓等を遣して、赴援せしめしに、明軍大に平壤に敗れ、承訓纔に身を以て免れ歸れり。因りて更に驍將李如松を遣し、不意に日本軍を襲ひて、平壤を克復せしかば、碧蹄館の一戦に、明軍又潰敗せり。因りて神宗は、楊方亨、沈惟敬をして、和を議せしめしが、事破れて、交戦尙ほ歳餘に亘りぬ。然るに秀吉死して日本軍引去り、戦役遂に已みたれども、明は積弊の餘、此難にあひて國力益疲弊し、朝鮮亦痛く荒廢せり。

愛親覺羅奴兒哈赤

滿清の興起 朝鮮の役と同時に、女眞族の裔なる愛親覺羅奴兒哈赤といふもの、兵を滿州に起して、傍近諸部を併吞し、又屢明の邊將を破り、勝に乗じて、遼河以東を平定し、都を瀋陽(今の奉天)に奠めて、連に諸城を攻め降せり。奴兒哈赤は、即ち清朝の太祖なり。



顧憲成

東林黨

蘭葡諸國  
來り迫る

東林の黨議も亦朝鮮の役と時を同じうして起れり。初め顧憲成といふもの、事を以て官を罷められしが、大に同志を集めて、學を宋儒楊時の建てたる東林書院に講じ、往々時政を諷議したり。憲成性剛直にして、學識一世に高く、士大夫の志を當代に得ざるもの、風を望みて景附し、鄒元標、趙星南等の名士之に應じ、朝臣亦漸く之と心を通ずるものあるに至りしかば、當時の執政等大に之を惡み、是れより東林黨攻撃の聲頻りに起り、黨爭次第に喧しかりき。

神宗の世は、實に明室瓦解の始にして、以上三大難の外に、和蘭、葡萄牙諸國は、南方より兵威を示して、通商を迫り來り、且國內所々に流賊起りて、天下復た救ふべからざる形勢となり。

第六節 明の滅亡

魏忠賢

東林黨の盛衰 神宗より光宗を経て、熹宗に至り、東林黨一時志を得たりしが、非東林黨は、官者魏忠賢と結托して、之を貶竄し、朝政益紊亂したり。熹宗死して、毅宗立つに及び、忠賢を貶し、其徒を黜けたれども、流賊の蜂起愈甚しく、滿州の勢力亦益強大となれり。

流賊の猖獗

京師陷る

清の南侵 時に滿州にては、太祖死して太宗位に在り、西は蒙古を伐ち、東は朝鮮を降し、又大に明軍を破りて、國を清と號し、こゝに南下の策を講ぜし際、太宗死して、世祖嗣げり。明の方にては、張獻忠、李自成等の流賊、山西に起りて、勢次第に猖獗となり、殊に自成は、西安(古長安)に據りて、國を大順と號し、破竹の勢を以て、攻め來りしかば、京師遂に陥り、毅宗自刎して死せり、自成乃ち帝位に上りぬ。



清世祖北  
京に入る

清の世祖は、父祖の志を継ぎて、大に南侵の師を發し、睿王多爾袞之を督して、征途にありしが、時に自成京師に入りしかば、明の將吳三桂の請を納れ、之と兵を合して、自成を攻め滅ぼしたり。是より三桂は、清に降りて、北京は遂に清の有となり、世祖直に駕を此地に遷したり。

**明の末路** かくて大勢略定まりしかば、明人尙ほ福王を南京に擁立して、敢て降らざりしかば、世祖兵を遣して、之を平げ、嚴に天下に令して、服を易へ、髮を辮せしめたり。時に明の遺臣、更に唐王を福州に立て、魯王亦之に應じて、勢稍振ひしが、清兵來り攻むるに及び、唐王は虜となり、魯王は走りて、鄭成功に廈門に頼れり。

鄭成功と  
臺灣

鄭成功は、明の遺臣鄭芝龍の子にして、母は日本人なり。魯王を奉じて、勤王の師を募り、一時は南京までをも克復するに至りしかば、後戰敗れて臺灣に據れり。魯王と同時に、明の宗室桂王は、肇慶(廣州の西)に據りて、帝號を持せしが、戰敗れて、緬甸に奔り、後遂に捕へ殺されたり。魯王及び成功亦相尋ぎて死し、明室遂に全く亡びぬ。然れども成功の子鄭經、尙臺灣に據り、明の正朔を奉じて、敢て清に従はざりき。

明の滅亡

至りしかば、後戰敗れて臺灣に據れり。魯王と同時に、明の宗室桂王は、肇慶(廣州の西)に據りて、帝號を持せしが、戰敗れて、緬甸に奔り、後遂に捕へ殺されたり。魯王及び成功亦相尋ぎて死し、明室遂に全く亡びぬ。然れども成功の子鄭經、尙臺灣に據り、明の正朔を奉じて、敢て清に従はざりき。

### 第七節 當代支那の學術宗教

**一、儒學** 元代の名儒には、許衡、吳澄あり、前者は朱子を祖述

し、後者は朱陸の説を雜ふ。明に至り太祖大に學術を獎勵せしかば、文運盛に起りて、薛瑄、王守仁等の大儒出でたり。瑄は英宗の時に出で、篤く程朱を信じて、躬行を務め、名聲一時に盛なりき。稍後れて王守仁(陽明)出づ。守仁は、文武兼備の士にして、其武功は第五節に述べたる如し。其學説は、陸子に基

薛瑄  
王守仁



き、更に一機軸を出し、ものなり。是より儒學分れて、二派となり、瑄を主とするものを、河東の學といひ、守仁を宗とするものを、姚江の學といひ、各門戸を分ちて相争へり。

元の俗文學

二、文學 元には詩文の觀るべきもの少きが中に、元好問、虞集の詩は、頗る有名なり。然れども戯曲小説は、元に至りて始めて發達し、琵琶記、西廂記、水滸傳等の名作出てたり。明にては宋濂、方孝孺、文名一世に高く、高啓(青邱と號す)の詩、特に當代に傑出せり。其後李燮龍、王世貞等盛に古文を唱へて、一世を聳動し、文章稍頑陋に傾きしが、其反動として歸震川、唐荆川等の文章家出でたり。戯曲小説亦盛に明代に行はれ、西遊記、金瓶梅等の奇書を出せり。

明の詩人文章家

元室と宗教

三、宗教 元は大に宗教を利用して、人心統一の具となし、一方に於ては、武威を以て四方を征服すると同時に、一方に於

喇嘛教の二派

ては佛教を崇びて民心を和げんことを務め、且一視同仁の主義を以て、何れの民、何れの教を問はず、其歸化布教を許しかば、佛教は勿論基督教亦頗る流布するに至れり。佛教は、元朝より以來、其一派なる喇嘛教の盛行を見る。喇嘛教は、唐代の初め、印度より西藏に傳はり、其教主は、政教兩權を握りて、世々西藏の主たりしが、元の世祖の時、教主八思巴を帝師に拜せしより、威權益加はりぬ。其衣帽紅色を尙へるを以て、紅教喇嘛と稱す。明に至りて宗喀巴（ツァンガパ）といふもの、別に新義を唱へて、其服色を黃にせり。是より喇嘛教、紅黃の二派に分る。

耶蘇教  
後奈良天皇の天文十七年  
(明の十七年)

耶蘇教は、第一節にも記せし如く、元の時代には、漸く支那に流行せり。明に至り、一旦之を禁制せしかど、中葉以後東西兩洋の交通開くるに従ひ、歐人の支那に來るもの、次第に多く、



宗の時宣教師  
宣教師  
シスザ  
イエ  
我國に  
利瑪竇

中に宣教師ありて、布教に務めたり。當時の教徒は重に舊教の「シエスイツト」派に屬せり。殊に神宗の朝に來りたる「マテオリツナ」(利瑪竇)は、大に帝の厚遇を受け、爾來信徒漸く増して、處々に教會の設立をさへ見るに至れり。

### 第八節 帖木兒の勃興

帖木兒

帖木兒 蒙古の分國なる欽察汗、伊蘭汗、察合台汗の三國は、次第に元室と相遠ざかりて、本支の關係全く絶え、其後三國共に衰亂して、帖木兒と稱する豪傑其間に崛起したり。帖木兒は、察合台汗國の人なり、其國の衰頽に乗じ、明の太祖即位の翌年を以て、兵を起し、先づ察合台汗國を平定して、更に西隣なる伊蘭汗國を滅ぼし、遂に欽察の「トクタミシユ」汗と、干戈を交ふるに至れり。

欽察汗國  
白黨

欽察の末路

欽察汗國は、拔都以來、數世の間、其盛を極めしが、後遂に白黨の「トクタミシユ」汗の爲に篡奪せられたり。(明の時)白黨は、初め拔都の兄幹魯朶の封せられたる國にして、又東欽察とも稱し、裏海、アラル海の間に國したるものなり。「トクタミシユ」の欽察汗位を篡ふや、實に帖木兒の助力を仰ぎたり。然るに志を得たる後、勢を恃みて、反りて帖木兒の領内に來侵したりしかば、帖木兒逆へ撃ちて、之を破り、更に其本國に侵入し、露國南部を蹂躪して、師を班せり。爾來欽察は、痛く衰微して、「アストラハン」「カザン」「クリム」の三國に分裂し、前二國は明の末頃に、「クリム」國は清代に至りて、何れも露西亞人の爲に滅ぼされたり。

帖木兒印  
度を略す

帖木兒は、更に印度征伐の途に上れり。さきに「ガズニ」國衰へて、「ゴール」國起り、印度を領せしが、暫時にして亡び、奴隸王朝



「トグラ  
ツク」王  
朝

「ネットア  
ントルコ」  
「バシアゼ  
ット」

「アンゴラ」  
戦争

といふもの之に代り、デルヒに都せり。帖木兒の時には、奴隸王朝既に亡びて、「トグラツク」王朝之に代り、印度の國勢痛く衰へ居たり。帖木兒は、之に乗じて、難なく「パンジア」地方を征服し、首府「デルヒ」を抄掠せり。然るに嘗て蒙古人の爲に、中央亞細亞より逐はれたる「オットマントルコ」人は、此頃に至りて漸く強く、「バシアゼット」其王たるに及びて、益盛大となり、東羅馬帝國の過半を征服して、將に鋒を中央亞細亞に向けんとする勢ありければ、帖木兒は直に印度より凱旋して、西征の策を定め、行く／＼諸城を屠り、大に「トルコ」軍と「アンゴラ」に會戦して、「バシアゼット」を生擒せり。（皇紀二〇六二年、即ち明の成祖纂立の前年）

**帖木兒死後の形勢** 帖木兒既に四隣を征服して、向ふ所敵なし。是に於て更に明を伐たんと欲し、大舉して東進せしが、

波斯「ア  
バス」王

途中病を獲て、遂に歿したり。蓋し帖木兒の事業は、電光の閃けるが如く、其雄大激烈なる、誠に人目を驚かすものありしかば、是れ唯だ一時に止まり、樞肉未だ冷かならざるに、其戦勝地は忽ち土崩瓦解したり。其後百餘年、「イスマエル」といふもの、波斯に起りて、「サフイー」朝を立て、（明の）其孫「アバス」大王に至り、四隣を征服して、大に地を拓き、都を「イスバハン」に奠め、又西洋諸國と使聘を通じて、國運隆盛に赴けり。波斯は、其後種々の沿革を経て、現今は「カシール」朝君臨するに至れり。

### 第九節 印度の形勢 葡人蘭人英人

**莫臥兒建國** 帖木兒の去るや、印度は又々分裂の状となり、其主權は、遂に阿富汗人に歸して、「ロデ」王朝君臨せしが、諸侯



「バアバル」

離叛して、紛擾を極めたり。此機に乗じて、能く印度統一の業を成し、ものを「バアバル」とす。「バアバル」は、帖木兒の裔にして、「カブール」地方に起り、南侵して、「ロデ」朝を滅ぼし、印度の大半を従へたり。(皇紀二一八六年即ち明の世宗の時)之を莫臥兒帝國の祖とす。然るに、「バアバル」の子、「フマユン」嗣ぎ立つに及びて、叛亂起り、帝逃れて、波斯地方に入りしが、後再び勢を得て、其土を恢復せり。

「アクバル」大帝

「フマユン」死して、其子「アクバル」帝立つ。英明にして、經綸の才に富み、土人に回教を強ふるの不利なるを悟りて、信教の自由を許し、又大に土人を登庸したり。且用を節し、儉を尙び、務めて舊風古俗を保存したりしかば、人民悦服して、大帝と尊稱せり。

「オーラングゼブ」

莫臥兒帝國の否運 「アクバル」より二代を経て、「オーラング

「ゼブ」帝

「ゼブ」帝立つ。其宗教上の壓制は、大に土人の不平を買ひ、南方土民は、「マアラツタ」同盟をつくりて、離叛したり。帝親征して、一旦之を平げしが、部下の諸侯、帝命を奉ぜざるもの漸く多く、加ふるに波斯人、阿富汗人の來侵、年に月に其勢を増し、同時に又野心満々たる歐人は、踵を接して、此帝國に入り來れり。

「バスコダガマ」

新航路の發見、後、奈良天皇の十年、(明の世宗の時) 牙人始に、來り、我國に、葡、英、諸

西洋諸國と印度 之よりさき、「ロデ」王朝の頃、葡國の「バスコダガマ」といふもの、喜望峯を廻航して、印度に着し、茲に始めて東西兩洋交通の新航路、發見せられたり。(皇紀二一五六年)時、爾後葡人の來航するもの漸く多く、「ゴア」錫蘭其他の要地を占領して、東洋貿易の利を壟斷すること、百許年なりしが、「アクバル」帝の晩年に至り、蘭英二國之と競争を始め、東印度商社を建て、葡人の領土を奪へり。かくて、「オーラングゼブ」



國の競争  
の初年には、葡人の勢力全く地に墜ちて、蘭人最も優勢なり  
き、(明室滅亡の頃)

### 重要事蹟年表

後宇多天皇	後醍醐天皇	伏見天皇	後一條天皇	後醍醐天皇	長慶天皇	後龜山天皇	後深草天皇	後小松天皇	後光厳天皇	後醍醐天皇	後宇多天皇	
一九四一	一九四三	一九四四	一九五二	一九五四	一九六三	二〇二八	二〇二九	二〇三六	二〇四九	二〇五〇	二〇五二	二〇五九
元祖	上同	上同	上同	上同	成宗	大明祖	上同	上同	上同	上同	上同	惠明帝
元日本に寇す	元緬甸を征す	元占城を征す	元瓜哇を征す	モンテコルビノ元に来る	察八兒元に降る	元亡ぶ	帖木兒興る	トクタミシユ欽察汗となる	「オットマントルコ」に「バジャゼット」出づ	帖木兒トクタミシユを破る	李成桂朝鮮王となる	帖木兒印度に入る

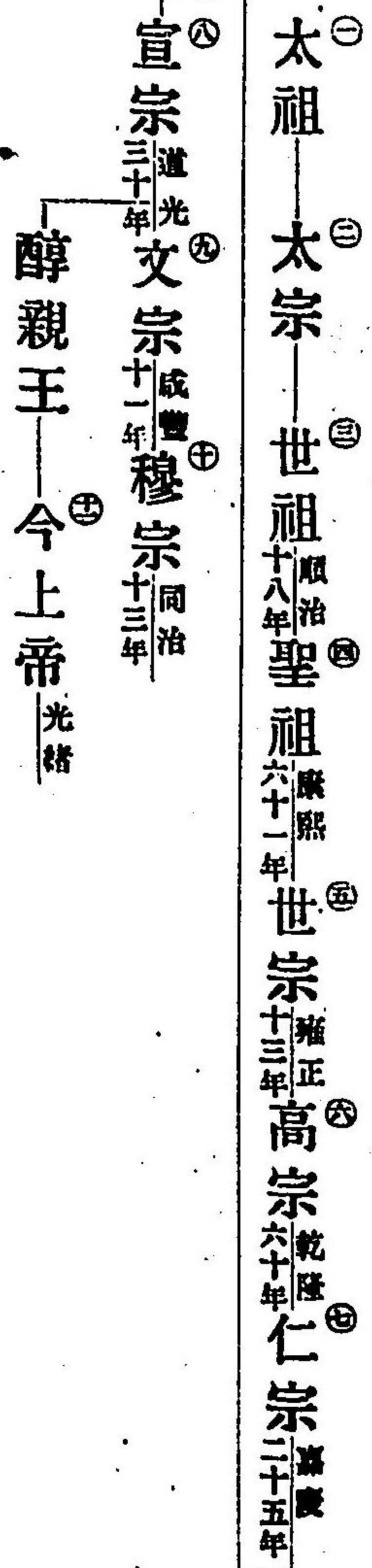






## 第七章 清時代(皇紀二三〇四年より現時に至る)

此時代は明の滅亡より今日まで、凡そ二百五十餘年の間にして、漢族全く勢力を失ひて、滿州族東亞の主權を執ることとなり、又東西兩洋の交通は、前時代に緒を發し、此時代に至り大に開けたり、左に清室歴代の世系を表示し、併せて世祖以來の年號を附記す。



### 第一節 康熙帝の勳業

三藩の亂 世祖死して、聖祖嗣ぐ。是れ即ち康熙帝にして、清朝の基礎は、實に帝の世に於て確立せり。之よりさき、明の降

聖祖  
三藩



吳三桂反  
賊勢猖獗

將にして、藩王と稱するもの、吳三桂を初めとして、尙可喜、耿精忠あり。此三人は、共に清の創業に與りて、功ありしものにして、三桂は雲南に、可喜は廣東に、精忠は福建に封ぜられ、皆大兵を擁して、隱然勢力ありき。聖祖の時、可喜病を以て藩籍を奉還し、郷里に歸老せんことを請ひしに、帝輒ち之を許し、かば、三桂自ら安んぜず、精忠と共に同じく、藩を撤せんことを請へり。蓋し其意は、己れ大功あれば、清廷必ず之を慰留せんことを期したるなり。然るに清廷直に其請を許しければ、三桂大に悲り、康熙十二年兵を擧げて反し、精忠亦三桂に應じ、暫時にして雲、貴、四川、湖南、廣西、福建の六省、悉く賊有となれり。既にして陝西の提督王輔臣、臺灣の鄭經、賊と連和し、尙可喜の子、之信亦父を幽して、賊に與し、事體頗る大となりしが、清廷兵を發して、征討に務めしかば、輔臣、精忠、之信、官軍に降

亂平ぐ

臺灣平ぐ

り、賊勢大に挫けたり。三桂尙ほ屈せず、遂に帝號を僭するに至りしかば、幾もなく三桂病みて死し、其孫世璠は勢蹙りて、自殺し、内亂全く平ぎぬ。時に康熙二十年なり。聖祖既に三藩の亂を平げ、更に臺灣を征す。時に臺灣にては、鄭經死して、其子克塽主たりしが、征師にあひて、出で降り、全島平定せり。

尼布楚條約

露國との交渉及び蒙古西域の經略 之よりさき露國は、漸く「ウラル」山東に領地を拓き、大に「コサツク」人を派出して、西比利亞の探檢と、征服とに、從事せしめたり。清朝の初頃には、「コサツク」人の足跡、既に「オコツク」海、及び「カムチヤツカ」に達し、かくて往々支那の北邊を寇するに至りしかば、聖祖兵を發して、之を撃退し、露國と「尼布楚」條約を結びて、清露兩國の境界を定めたり。



噶爾丹の跋扈

漠北平ぐ

西藏定まる

内蒙古諸部は、太宗の時既に内屬せりと雖も、漠北には喀爾喀あり、漠西には厄魯特(天刺と同種にして、今あり、各數部に分れて、未だ清朝に従はざりき。然るに厄魯特の準噶爾部に、噶爾丹といふもの起り、他の部酋を攻め破り、悉く天山南北の地を併せて、喀爾喀諸部に及べり。喀爾喀諸部の酋長、清に來り訴へければ、清廷は噶爾丹に諭して、其侵地を還さしめんとせしに、噶爾丹肯んぜず。聖祖乃ち親征して、大に之を漠北に破りければ、噶爾丹窮して、自殺し、阿爾泰山東悉く清の版圖に歸せり。

時に噶爾丹の姪策妄拉布坦、自立して、厄魯持全部を従へ、更に西藏を略せしかば、聖祖は直に兵を西藏に發して、悉く厄魯特兵を驅逐し、新に戍兵を置き、又教主達賴喇嘛に封を加へて、西藏全く鎮定したり。

聖祖の功業

聖祖の功業 帝性英邁、其武功は既に述べたる如く、其文勳亦之に譲らず。(第三節 儒學を以て、中國に臨み、喇嘛教を以て、西域を懐け、在位六十一年の間、國富み、兵強かりき。帝の後は、世宗、高宗、其遺志を紹ぎ、清の版圖、益擴張するに至れり。

### 第二節 清領の擴張

世宗

策零

世宗の外征 世宗の雍正元年、青海叛して、西邊を侵し、かば、清將撃ちて之を破りしに、其酋長逃れて準噶爾に入れり。清廷乃ち準噶爾の酋長策零(策妄拉布坦の子)に諭すに、青海の逃酋を獻すべきを以てせしに、策零敢て命を奉ぜず。因りて諸將を遣して之を征せしめ、迭に勝敗ありしが、後遂に和を講じたり。

高宗

### 高宗の外征

高宗は、康熙雍正の政策を承けて、大に力を外



準部平ぐ

回部平ぐ

康熙雍正

征に用ゐたり、時に策零死して準噶爾亂れ、其族阿睦撒納アマツナといふもの、清に來奔して、其取るべき狀を陳奏せしかば、帝直に西征の師を發して、其地を平げたり、然るに清兵の撤歸するに及び、阿睦撒納叛きて、清の守將を殺し、かば、帝再び兵を出して、之を討滅し、準噶爾地方全く清領となれり。

時に喀什噶爾カシガル（天山南路）の霍集占ホシケンといふもの、其兄布羅尼特ブルニトと共に、清に對して反抗の兵を起したり、帝乃ち諸將をして、之を撃ち破らしめしかば、二人出奔して、西に逃れ、遂に土酋の爲に殺されたり、是に於て回部全く平ぎ、清の威令は、遠く葱嶺以西に及べり。

清の全盛 高宗は、更に兵を南方に向けて、緬甸を降し、安南を屈し、（第九節 参照）其他二三の内亂を裁定し、清の國威益輝けり、要するに康熙、雍正、乾隆の三代、凡そ百三十年間は、清朝最盛

乾隆の三代

の時にして、内は制度典章粲然として、文運大に興り、外は諸蕃風を望みて、歸降し、蒙古、西域、西藏は、全く其屬地となり、朝鮮、安南、暹羅、緬甸等亦幣を納れて、來貢したり。

### 第三節 清朝の制度學藝

官制

一、制度 政府の組織は、内閣を中心とし、大學士協辦大學士ありて、萬機を總理し、其下に六部（吏、戶、禮、兵、刑、工）の尙書ありて、政務を分掌す、又別に軍機所を設けて、軍國の大事を處せしめ、總理各國事務衙門を設けて、外交の事を掌らしめ、理藩院を設けて、蒙古西域の政令を統べしめ、都察院を設けて、官紀を督察せしむ、又地方には總督及び巡撫あり、一省乃至二省の地を管して、文武の大政を統轄し、布政司ありて、錢穀出納の事を司り、按察使ありて、刑獄の事を理し、道台ありて、鹽法驛傳



軍制

海關巡守等の事に任じ、知府知州知縣ありて、民治を掌る。軍制は、陸軍に八旗、綠旗、鄉勇の三あり、水師に北洋、南洋、長江、福建、廣東の五あり。八旗は、太宗の編成せるものにして、滿漢蒙の三人種より成り、黃白紅藍の四色、各正饜に分れ、或は京師を護衛し、或は地方に駐防す。綠旗は、専ら漢人を以て編成せるものにして、各省に駐在す。鄉勇は、義勇兵の類にして、髮賊の亂後(第六節に出づ)に始まり、各省大抵之あり。考試の制は、府縣にて歲試を行ひ、及第者を秀才といふ。秀才の上を舉人と稱し、各省首都にて鄉試の結果之を授く。舉人の上を進士と稱し、北京にて會試の結果之を授く。會試に及第せる者は、殿試を受くることを得しめ、之に成功するときは、重要な官吏に任用せらる。

(以上の制度中、乾隆以後に定りたるものあれども、便宜の

歲試、秀才、鄉試、舉人、會試、進士

考證學起、清の名儒、及び文學者

清の著述

ため、こゝに併せ記せり。

二、學藝 清朝に至りて、學風の一變せることは、頗る注意すべきことなり。宋以來盛に行はれし高遠空疎なる理學の反動は、明清の際に顯はれ來りて、緻密精確なる考證學となり、明の遺儒顧炎武、其緒を開きて、閻若璩、毛奇齡、惠棟等の大家續出せり。又文章に於ては、魏禧、朱彝尊、侯方域最も著はれ、詩賦に於ては、王士禛、吳偉業、蔣士銓殊に名高し。歴史家には、王鳴盛、趙翼あり。戯曲小説家には、金聖嘆、李漁あり。康熙乾隆の際、文運實に盛なりき。されば當時圖書典籍の、政府及び民間に於て編著せられたるもの極めて多く、就中佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典等は、何れも勅撰に成りたるものにして、稀有の大著たり。



第四節 清朝の衰運

仁宗以後の清朝 清朝の盛運は、前既に述べたる如し。然れども仁宗以後は、内憂外患頻に起りて、國勢漸く振はざるに至れり。

教匪起る

仁宗の世 初め乾隆の末年、白蓮教徒、四川陝西湖北の人民を煽して、亂を作し、が朝廷嚴に逮捕して、之を鎮壓したり。仁宗位に即くに及び、其徒又盛に湖北に起り、河南、四川、陝西地方に蔓延して、勢を逞しうせり。官軍之を征し、前後七歳を費して、平定の功を奏したり。

海賊起る

時に蔡牽（蔡牽）といふものあり、閩粵地方の海賊を嘯集して、奪掠を恣にし、一たび浙江提督李長庚の爲に破られしが、後臺灣に據り、自ら鎮海王と稱せり。其後賊勢挫けて、牽は安南に逃れ、海寇始めて平きぬ。

回部の亂

宣宗の世 曩に乾隆の朝に叛したる布羅尼特（布羅尼特）の孫に、張格爾（張格爾）といふものあり。清兵の追捕を免れて、浩罕（浩罕）（葱嶺）に在りしが、仁宗の末年、回部の鎮將、民心を失ひて、政令大に紊れたるに乗じ、其徒を率ゐて、來寇し、進みて喀什噶爾に迫り、諸部を降したり。宣宗即位の後、諸將をして、路を分ちて、之を追討せしめ、遂に張格爾を生擒したり。

一大國難

宣宗の朝には、一大國難起れり。之を鴉片戦争（鴉片戦争）と云ふ。事は英國に關するを以て、次節に於て、先づ英國の東洋に於ける經略を説き、然る後此戦争の始末を語らん。

第五節 英國と印度 鴉片戦争

印度に於ける歐洲諸國民の競争 前章第九節に於て述べたる如く、明末の頃、印度にては葡人の勢力漸く衰へて、英蘭



印度に於ける英佛の勢力

二國各東印度商社を立て、兩國の競争方に烈しかりしが、稍後れて、佛國亦指を印度に染め、佛東印度會社を興して、徐に其勢力を鞏めしか、英は遂に「マドラス」「カルカッタ」「ボンベイ」等の要所を占領し、佛亦「ボンヂナエリ」を占領して、兩國の勢力次第に加はり、康熙年中には、葡人は勿論、蘭人の勢力も亦全く衰ふるに至れり。

「ヂュープレー」

「クライブ」

英獨り盛なり

既にして佛將「ヂュープレー」は、莫臥兒帝國の運命を看破して、始めて印度蠶食の大策を立て、恩威を以て、巧に諸侯を籠絡しければ、南方印度悉く之に靡き、「ヂュープレー」の威名、遠近に轟けり。是に於て英將「クライブ」は、其勢を殺がんご欲し、兵を發して佛人を破り、其根據地を恃める「ボンヂナエリ」を陥れたり。尋で「ヂュープレー」は、本國に召還せられ、佛東印度會社並に仆れて、英人獨り其權勢利益を擅にすることとな

英人印度の主權を執る

「ヘスチングス」

れり。時に「ベンガル」「藩王」「シコラジアドーラ」といふもの、不意に「カルカッタ」を襲ひて、英人を虐殺せしかば、「クライブ」直に兵を率ゐて、大に之を破り、爾來「クライブ」は、權謀と兵力とを以て、帝國の政務に干涉し、且佛蘭の餘類を逐ひて、英國の威權を全印度に確立し、終には一東印度商會の力、能く莫臥兒大帝國を左右するに至れり。是實に乾隆年中の事なり。

莫臥兒帝國の滅亡 其後「クライブ」は、本國に召還せられ、「ヘスチングス」代りて、太守となり、頻に諸侯王を征服し、清の仁宗の時代には、南「コモリン」岬より、北喜馬拉山麓に至るまで、殆んど皆英國の版圖たるに至れり。爾來印度人獨立を企つるものありしが、悉く鎮定せられ、遂には英國政府よりの命令を以て、東印度商會を廢し、全印度を擧げて、女皇の直轄とせり。(皇紀二五)又莫臥兒帝は、英人より年金を受けて、纔に虚



莫臥兒帝  
廢せらる

器を擁したりしが、是に至りて廢せられ、莫臥兒帝國は、跡方もなく滅亡し了りぬ。

林則徐

清英の開  
戦

**鴉片問題** 英人の支那に通ぜしは、明の末に始まり、其印度併呑後は、貿易益活潑となり、且東印度商會より、盛に鴉片を清國に輸入し、仁宗の晩年には、三千餘兩に過ぎざりしもの、宣宗の中世には、十倍の巨額に上り、害毒を流すこと甚しかりき。是に於て林則徐、兩廣總督となり、英商に嚴談して、悉く蓄ふる所の鴉片を出さしめ、之を焼き棄て、堅く英人の互市を禁制したり。是に於て英國政府は、戰艦を派遣し來り、迫りて曰く、互市を復せば則可なり、然らずんば戰あるのみ。則徐、斷然之を却く。時に英國にては、パルマーストーン外交の衝に當り、銳意進取の策を執りたる際なりしかば、英艦直に來りて、香港を掠め、舟山を下し、寧波を圍み、兵勢甚熾なり。

和成る

清廷乃ち則徐を罷め、琦善を廣東にやりて、和を議せしめしが、事成らずして、戰端又開け、香港、廈門忽ち敵の有となり、定海、鎮海、上海、吳淞等、亦陥りたり。清廷乃ち再び和を請ひ、償金二千六百萬兩を出し、香港を讓與し、廣東、福州、寧波、廈門、上海の五港を開きて、事漸く平きたり。

洪秀全

第六節 髮賊の亂 英佛の來攻

**長髮賊** 鴉片戰爭の後、清の國威漸く衰へ、且兩廣の地大に餓え、盜賊蜂起せり。時に洪秀全といふものあり、夙に異圖を抱き、天主教を唱へて、世人を誘導したりしが、機を見て起ち、馮雲山、楊秀清等と共に、叛旗を廣西に翻し、文宗の咸豐元年、秀全自ら太平天國王と稱し、湖南の諸城を破り、勝に乗じて、長江を下り、一舉南京を陥れて、都を此地に定めたり。時に刑



魯國藩

長髮賊

「パークス」

英佛同盟軍北京を陥る

部侍郎曾國藩母の喪にて湖南に歸郷したりしが、詔を拜して、郷勇を募り、湖南一帯の賊を驅除せしかば、賊將楊秀清善く戦ひて、湖南忽ちまた賊有となり、官軍の將胡林翼等奮戦して、迭に勝敗ありき。所謂長髮賊の亂は、即ち是れなり。清英の葛藤、斯く内亂の甚しきに當り、更に外難を醸すに至れり。當時廣州府吏、清人の英船に備役せらるゝを見て、之を逮捕したるこそありしより、英清兩國の間に葛藤を生じ、英國領事「パークス」は、遂に武力に訴へて、廣州の市街を焼き、且佛國と相提掣して、天津に迫れり。因りて清廷、新に通商條約を訂結せしに、英佛兩國の使臣、北京に於て、條約の批准を交換せんが爲に、白河を浜りし時、不意に兩岸より砲撃を受け、れば、兩國の使臣大に其不信を怒り、英佛同盟軍直に進んで、太沽を陥れ、天津を取り、遂に北京に入れり。之よりさき

和成る

之よりさき仁宗の朝、日本、光緒天皇の時、露人の權太島を侵し、又千島を畧したり。日本は樺太島を略し、日本と露國と、千島と、樺太島と、交換せり。

文宗は、既に逃れて熱河に在り、皇弟恭親王をして和を請はしめ、露國使臣亦調停に務めしかば、和遂に成り、清は償金千八百萬兩を出し、且牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口の諸港を開く事となれり。又露國は、英佛同盟軍の未だ迫らざるに先立ち、清廷の狼狽せるに乗じ、強ひて愛琿條約を結ばしめて、悉く黒龍江北の地を收めたりしが、今又調停の勞を執りたる報酬として、北京條約により、烏蘇利江東の地を得たり。  
(浦鹽斯德港は、烏蘇利江東に在り。)

第七節 髮賊の平定 臺灣の紛議

髮賊の平定 外難纔に己みしかば、髮賊の勢更に減せず。文宗乃ち曾國藩を兩江總督に任じて、江南の軍務を統べしめ、曾國荃、左宗棠、李鴻章等の諸將、亦各奮戦して、専ら討賊に力



外人清を  
助く

洪秀全死す

沖繩群島

めたり。かゝる際文宗死して穆宗の世となり、賊鋒將に上海に迫らんごしければ、英米佛の三國人相議して、清を援け、殊に米人華爾特、英人戈登の二將、相尋ぎて軍を指揮し、戦ふ毎に奇功を奏しければ、常勝軍の名を得たり。是より官軍勢を得て、賊勢次第に衰へ、賊の驍將陳玉成、石達開等、前後生擒せられ、洪秀全亦事の成らざるを見て、金陵城中に自殺し、餘黨悉く平ぎぬ。(皇紀二五二四年即同治三年)秀全兵を起してより、茲に至るまで、前後十六年に亘り、城を屠るごご六百に餘り、十六省の地其侵害を受け、國力痛く疲弊せり。

清と日本 此頃日本にては、維新の大業既に其緒に就き、使臣を遣して、清國と好を修め、又從來清朝が其藩邦の如く誤認したりし沖繩群島を、明に其版圖となしぬ。然るに沖繩及び備中の人、臺灣に漂着して、蕃民の爲に虐殺せられしかば、

臺灣問題

日本は參議副島種臣を北京に派して、之を詰らしめしに、清國政府は、臺灣東部は清朝化外の民なれば、我が關する所にあらずと答へたり。日本政府乃ち問罪の師を發し、西郷從道之が總督となり、兵艦五隻を率ゐて、臺灣を攻め、其東南部を略定したり。清廷之を聞き、急に辭を變じて異議を唱へ、速に兵を撤せんごごを日本に要求せしかば、日本全權辦理大臣大久保利通、北京に來り、談判する所ありしかご、議久しく決せず。利通奮然袂を拂つて去らんごするに至りしが、英國公使の調停により、清より償金五十萬兩を出して、和成れり。穆宗此年を以て死し、宣宗の孫載灃位に即く、今上皇帝即ち是れなり。

第八節 中央亞細亞の形勢 伊犁問題



**中央亞細亞** 當時中央亞細亞の大勢を一括すれば、「アム」河  
 北即ち土耳其斯坦地方は、「ウスベク」人に屬し、「キザア」「ボクハ  
 ラ」「ユーカン」の三汗、最も有力なり、「アム」河南即阿富汗地方は、  
 阿富汗人に屬し、「カブール」汗主權を握りしかど、統一的國家  
 と稱し難し。是時に當り、英は南より、露は北より、各此地に垂  
 涎せり。

露の南下  
 英の北侵

之よりさき露國は、黒海に高加索に、着々南侵の歩を進めし  
 かば、機敏なる英人は、早くも阿富汗の經營を急ぎ、或は威し、  
 或は懐け、遂に其大半を保護國としたり。露國亦益南下の策  
 を講じ、右に波斯を籠絡し、左に、「ウスベク」人を従へて、次第に  
 「アム」河地の地を蠶食せり。  
**清露の葛藤** 此頃清國にては、穆宗位に在り、髮賊の亂方に  
 酣なりしが、回部の人民、此機に乗じて、亂を作し、天山南路を

左宗棠  
 曾紀澤  
 伊犁問題  
 定まる

略取せり。露國乃ち疆土を成るに託し、兵を出して伊犁(天山北路)  
 を占領せり。既にして髮賊の亂平ぎければ、清將左宗棠は、兵  
 を率ゐ來りて、叛徒の征服に従事し、今上帝の初年を以て、全  
 く回部を定めたり。然れども伊犁は、依然露人の占領する所  
 となりければ、清廷其還附を求め、全權大使崇厚、露國に使し  
 て、假條約を結びしが、清廷之に異議を唱へて、談判遂に破れ、  
 露將「コフマン」は、新疆の境を壓して陣を張り、清將左宗棠亦  
 兵を哈密(回部の東部)に擁して、將に一大事とならんこせしに、曾  
 紀澤(國藩の子)全權大使の任を帯び、露京に至りて、再度の談判を  
 なすに及び、兩國各一步を譲りて和成り、露は其侵地を還し、  
 清は軍費九百萬「ルーブル」を償ひたり。時に光緒七年(皇紀二  
 年)なり。

**英露の衝突** 斯くて露國の南侵は、尙ほ已まず、殆ど土耳其